福童町遺跡4・6
福童東内畑遺跡

―小郡市福童所在遺跡の調査報告―

小郡市文化財調査報告書　第226集

２００７

小郡市教育委員会

福童町遺跡4・6
福童東内畑遺跡

—小郡市福童所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書　第226集

2007

小郡市教育委員会

序

小郡市は豊かな自然と地理的環境を背景に、近年ベッドタウンや工業団地をはじめとするさまざまな開発によって発展を続けています。また、これらに伴う発掘調査では、弥生時代から近代にいたる幅広い時代の歴史的遺産が次々と発見されています。

今回ここに報告する福童町遺跡・福童東内畑遺跡においては、江戸時代の集落とそこで暮らした人びとの生活用品が多数出土しました。近世の小郡市には『薩摩街道』と称された街道があり、参勤交代で江戸へ向かう九州各藩の諸大名や、伊勢詣・熊野詣など旅をする庶民が行き交った地域でした。それと同時に筑後川を水源とする広大な田畑が広がる農村があり、久留米藩の財政を支える重要な場所でもありました。本書が当時の人びとの生活と文化を、現在に生きる人びとへ伝える一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査を行なうにあたり、地元西福童区の皆さまには多大なご理解、ご協力をたまわりました。深く感謝申し上げる次第です。

平成19年３月31日

小郡市教育委員会
教育長　清　武　　輝

例　言

1．本書は小郡市福童字町・江削に所在する埋蔵文化財包蔵地　福童町遺跡地内及び字東内畑に所在する埋蔵文化財包蔵地　福童東内畑遺跡地内に計画された「下町西福童16号線道路改良工事」に伴う発掘調査報告書である。本調査は小郡市役所都市計画部道路建設課から予算の執行委任を受け、小郡市教育委員会文化財課が実施した。

［調査参加者］（敬称略、五十音順）

〈福童町遺跡-4〉牛島信雄　黒瀬シゲ子　古賀憲明　佐藤誠一　佐藤昌子　高松ヨシエ　田中安美子　田中フジ子　花田直恵　福田紀美子　福田喜代子　福田佐和子　福田浪子　中川清信　野田美根子　森本智慧子

〈福童東内畑遺跡・福童町遺跡6〉伊東みさ子　小川高征　佐藤誠一　佐藤昌子　田熊恵子　田中賢二　林清津子　森下弥寿治　横田雅江　山田和子　山本絹子　（以上小郡市在住）

2．本書に掲載した個別遺構図面は調査担当者が作成し、遺構配置図作成は株式会社　埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に委託した。

3．本書に掲載した個別遺構写真は調査担当者が撮影し、調査区全景写真撮影は株式会社九州航空（福童町遺跡４）・有限会社空中写真企画（福童東内畑遺跡・福童町遺跡６）に、遺物写真撮影は有限会社文化財写真工房に委託した。

4．遺物の洗浄・復元には衛藤知嘉子・角野朋子・佐々木智子・田中慈美子・田鍋桂子・百嶋八千代の協力を得た。遺物実測は調査担当者が、製図は吉田あや子が行なった。

5．本書に掲載した陶磁器の時期決定には、九州近世陶磁学会編2000『九州陶磁の編年』を参考とした。また一部遺物については佐賀県立九州陶磁文化館館長の大橋康二氏に生産地・製造年代についてご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。

6．本書の執筆・編集は上田が行なった。

7．本調査に関する出土遺物・図面・写真・カラースライド等については、全て小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。

凡　例

1．本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標に拠っている。

2．本書で用いた標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。

3．本書での土色表記は農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳　1997年版』を用いて行なった。

4．本書の挿図においては下記の遺構略号を用いている。

土坑：SK　溝状遺構：SD　ピット：SP　土壙墓：SR　その他・不明遺構：SX

5．本書の挿図について特に記載のないものは、個別遺構図は40分の１、出土遺物実測図は４分の１で作成している。

本 文 目 次

序
例言　凡例

Ⅰ．調査の経緯と経過 …… 1
（1）調査の経緯 …… 1
（2）調査の体制 …… 1
（3）調査の経過 …… 1

Ⅱ．位置と環境 …… 3

Ⅲ．福童町遺跡４の遺構と遺物 …… 5
（1）調査の概要 …… 5
（2）遺構と遺物 …… 6
（3）成果の概要 …… 10

Ⅳ．福童町遺跡６の遺構と遺物 …… 13
（1）調査の概要 …… 13
（2）遺構と遺物 …… 13
（3）成果の概要 …… 19

Ⅴ．福童東内畑遺跡の遺構と遺物 …… 21
（1）調査の概要 …… 21
（2）遺構と遺物 …… 21

Ⅵ．調査成果のまとめ …… 44

Ⅶ．調査成果の検討 …… 45
（1）溝状遺構の機能について …… 45
（2）福童東内畑遺跡の陶磁器について …… 50
（3）福童東内畑遺跡の埋甕遺構について …… 54

写真図版
抄録

福童町遺跡　調査風景

福童東内畑遺跡　調査風景

挿 図 目 次

第１図　小郡市地形図 …… 3
第２図　調査区位置図（S=1/2500） …… 3
第３図　周辺遺跡分布図（S=1/25000） …… 4
第４図　10号溝状遺構遺物出土状況 …… 5
第５図　福童町遺跡４　遺構配置図（S=1/150） …… 6
第６図　福童町遺跡４溝状遺構土層断面図 …… 8
第７図　１・２号土坑 …… 9
第８図　溝状遺構出土遺物 …… 10
第９図　木棺墓（S=1/30） …… 10
第10図　福童町遺跡６　遺構配置図（S=1/150） …… 11・12
第11図　１・２・３・４・５号土坑 …… 14
第12図　溝状遺構出土遺物 …… 15
第13図　福童町遺跡６溝状遺構土層断面図 …… 16
第14図　１号土壙墓 …… 18
第15図　福童東内畑遺跡　Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図（S=1/200） …… 20
第16図　１・２・３・４・５・６号土坑（S=1/30）及び出土遺物 …… 22
第17図　７・８・９・10号土坑及び出土遺物 …… 23
第18図　２号溝状遺構遺物出土状況及び出土遺物 …… 25
第19図　11～16号土坑（S=1/30）及び出土遺物 …… 26
第20図　17号土坑（S=1/30）及び出土遺物 …… 27
第21図　３・４・５・６号溝状遺構土層断面図及び出土遺物 …… 28
第22図　福童東内畑遺跡　Ⅲ区遺構配置図（S=1/150） …… 30
第23図　27・28・29・31号土坑及び29号土坑出土遺物 …… 31
第24図　30号土坑及び出土遺物 …… 32
第25図　12・13号溝状遺構出土遺物 …… 33
第26図　福童東内畑遺跡　Ⅳ区遺構配置図（S=1/150） …… 34
第27図　18・19号土坑及び出土遺物 …… 35
第28図　20～24号土坑（S=1/30） …… 36
第29図　７～11号溝状遺構土層断面図及び出土遺物 …… 38
第30図　Ⅰ・Ⅱ区１号溝状遺構出土遺物 …… 39
第31図　Ⅱ区１号溝状遺構出土遺物（1） …… 41
第32図　Ⅱ区１号溝状遺構出土遺物（2） …… 43
第33図　遺跡地周辺の状況 …… 45
第34図　古代の条里制復元図と調査区の位置関係 …… 46
第35図　明治期地籍図と調査区の位置関係 …… 48
第36図　土鍋の断面模式図 …… 50
第37図　17世紀代の肥前陶器の製品例 …… 52
第38図　17世紀代の肥前陶器の製品例 …… 52

福童東内畑遺跡　Ⅱ区 1 号溝状遺構出土　芙蓉手磁器

福童東内畑遺跡　Ⅱ区１号溝状遺構出土　肥前陶器甕

巻 末 写 真 図 版 目 次

図版1 ① 福童町遺跡4 調査区全景（1）（南上空から）
② 福童町遺跡4 調査区全景（2）（真上から）
図版2 ① 1号溝状遺構 土層断面（東から）
② 2号溝状遺構 土層断面（東から）
③ 1・2・3・4・5号溝状遺構 完掘状況（東から）
④ 6号溝状遺構 土層断面（南から）
⑤ 6号溝状遺構 完掘状況（北から）
⑥ 7号溝状遺構 完掘状況（北西から）
⑦ 8・9号溝状遺構 土層断面（北から）
図版3 ① 8号溝状遺構 完掘状況（南西から）
② 10・12号溝状遺構 土層断面（北から）
③ 9・10号溝状遺構 土層断面（南から）
④ 10号溝状遺構 遺物出土状況（北西から）
⑤ 9号溝状遺構 完掘状況（南から）
⑥ 10・11・12号溝状遺構 完掘状況（北から）
図版4 福童町遺跡6 調査区全景（合成処理、写真上方が南）
図版5 ① 1号溝状遺構 完掘状況（北から）
② 2・8号溝状遺構 完掘状況（南から）
③ 3号溝状遺構 完掘状況（北から）
④ 4・9号溝状遺構 完掘状況（南から）
⑤ 5号溝状遺構 完掘状況（北から）
図版6 ① 6号溝状遺構 完掘状況（南から）
② 7号溝状遺構 完掘状況（北西から）
③ 17号溝状遺構 完掘状況（南東から）
④ 10・16号溝状遺構 完掘状況（北から）
⑤ 11号溝状遺構 完掘状況（北西から）
⑥ 12号溝状遺構 完掘状況（西から）
図版7 ① 14号溝状遺構 完掘状況（北西から）
② 2号土坑 土層断面（東から）
③ 2号土坑 完掘状況（東から）
④ 3号土坑 完掘状況（北西から）
⑤ 4号土坑 完掘状況（北東から）
⑥ 5号土坑 土層断面（西から）
⑦ 5号土坑 完掘状況（北西から）
⑧ 1号土壙墓 完掘状況（西から）
図版8 福童町遺跡4・6 出土遺物
図版9 福童東内畑遺跡 調査区全景（合成処理、写真上方が南）
図版10 ① 1号溝状遺構及び1・2・3号土坑（北から）
② 5号土坑 遺物出土状況（東から）
③ 6号土坑 遺物出土状況（東から）
④ 7号土坑 遺物出土状況（南上方から）
⑤ 8号土坑 完掘状況（南西から）
⑥ 9号土坑 遺物出土状況（南西から）
⑦ 10号土坑 完掘状況（東から）
図版11 ① 11号土坑 遺物出土状況（東から）
② 13・14号土坑 完掘状況（西から）
③ 15号土坑 完掘状況（北西から）
④ 16号土坑 完掘状況（北東から）
⑤ 17号土坑 完掘状況（南東から）
⑥ 18・24号土坑 完掘状況（西上方から）
⑦ 19号土坑 土層断面（東から）
⑧ 20号土坑 完掘状況（東から）
図版12 ① 21号土坑 土層断面（北西から）
② 23号土坑 土層断面（南東から）
③ 27号土坑 土層断面（南から）
④ 27号土坑 完掘状況（北から）
⑤ 28号土坑 完掘状況（北西から）
⑥ 29号土坑 土層断面・遺物出土状況（南から）
⑦ 30号土坑 土層断面・遺物出土状況（西から）
⑧ 30号土坑 完掘状況（北から）
図版13 ① 1号溝状遺構 完掘状況（Ⅱ区南から）
② 1号溝状遺構 遺物出土状況（1）（Ⅱ区）
③ 1号溝状遺構 遺物出土状況（2）（Ⅱ区）
④ 1号溝状遺構 遺物出土状況（3）（Ⅱ区）
⑤ 1号溝状遺構 遺物出土状況（4）（Ⅱ区）
⑥ 1号溝状遺構 遺物出土状況（5）（Ⅱ区）
図版14 ① 1号溝状遺構完掘状況（Ⅳ区南から）
② 1号溝状遺構 遺物出土状況（Ⅳ区南から）
③ 2号溝状遺構 完掘状況（南西から）
④ 3・6号溝状遺構 完掘状況（西から）
⑤ 1・4号溝状遺構間 土層断面（北から）
⑥ 5号溝状遺構 土層断面（東から）
⑦ 6号溝状遺構 土層断面（西から）
図版15 ① 7号溝状遺構 完掘状況（西から）
② 8号溝状遺構 完掘状況（西から）
③ 9号溝状遺構 完掘状況（西から）
④ 10・11号溝状遺構 完掘状況（北から）
⑤ 13号溝状遺構 遺物出土状況（南東から）
図版16 福童東内畑遺跡 出土遺物（1）
図版17 福童東内畑遺跡 出土遺物（2）
図版18 福童東内畑遺跡 出土遺物（3）
図版19 福童東内畑遺跡 出土遺物（4）
図版20 福童東内畑遺跡 出土遺物（5）
図版21 福童東内畑遺跡 出土遺物（6）
図版22 福童東内畑遺跡 出土遺物（7）

Ⅰ．調査の経緯と経過

（1）調査の経緯

本遺跡の調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地福童町遺跡地内（小郡市福童字町386－4・同字江削304－3他5筆）が「下町西福童16号線」道路改良工事の対象地となり、平成17年6月8日付で小郡市役所道路建設課より埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号0554）が提出されたことに始まる。これを受けて、小郡市教育委員会文化財課で同年7月21日に対象地の一部で試掘調査を行った結果、中世の遺構・遺物が確認され遺跡の存在が認められた。また試掘地以外にも遺跡の延長が確認されたことから、対象地全体について開発に先立った協議が必要である旨の回答を行った。引き続いて、同工事の対象地である小郡市福童字東内畑等（字町304－4・字東内畑499－2他4筆）についても平成17年11月17日付で埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号05138）が提出され、試掘調査の結果上記の地点から連続する遺跡の存在が確認された。その後の協議により、文化財課が予算の執行委任を受け、福童町遺跡地内のうち2筆を平成17年度事業として、その他5筆と福童東内畑遺跡地内については平成18年度事業として、それぞれ開発対象地の発掘調査を実施し、平成18年度内に全ての遺跡の調査報告書を刊行することで同意を得た。

（2）調査の体制

本調査に関わる組織は以下の通りである。

〈小郡市役所都市建設部〉
部長 組坂 弘幸
道路建設課長 北原 良信（～H17.3.31）
佐藤 吉生（H17.4.1～）
道路2係長 栖原 正明（～H18.3.31）
松井 秀章（H18.4.1～）
福田 安信（～H18.3.31）
井手 渡
小坪 恒之（H18.4.1～）
田中憲一郎（H18.4.1～）

〈小郡市教育委員会〉
教育長 秋山 幸子（～H17.6.30）
清武 輝（H17.7.1～）
教育部長 高木 良郎（H17.4.1～7.31 課長兼任）
文化財課長 田篭千代太（H17.8.1～）
係長 大石 義行（H18.3.31）
技師係長 片岡 宏二（H18.4.1～ 文化財係長）
技師 上田 恵

（3）調査の経過

発掘調査は平成17年9月12日から平成18年9月21日にかけて断続的に実施し、各調査と併行して整理作業および報告書作成を行った。以下調査日誌より抜粋した経過を記す。

〈福童町遺跡4〉

平成17年9月12日重機による表層土除去開始（～15日） 13日株式会社MECCより発掘調査取材の申し込みを受け、これを承諾（以後3回取材がなされ、ケーブルテレビで放送される） 20～22日埋蔵文化財調査センター新館引越作業のため作業中断、近隣から調査の進捗状況についてクレーム 26日Ⅰ区より人力による遺構検出及び掘削開始、溝3条・ピット群を検出（上面） 10月4日Ⅰ区上面遺構図作成 6日調査区西側（以下Ⅱ区）の遺構検出及び掘削開始（上面） 12日Ⅱ区遺構面確認のため調査区断ち割り 13日Ⅰ区写真撮影用清掃 14日Ⅰ区上面全景写真撮影 17日両区で重機による下面遺構検出開始（～18日）、併行して人力による遺構検出及び掘削開始、以降随時個別遺構図・土層断面図・遺物出土状況図等を作成、遺構写真撮影を実施 25日遺構掘削完了 26日写真撮影用清掃 27日調査区全景写真撮影 28日調査区全体図作成（～11月2日）、個別遺構図作成 11月4日機材撤収、調査終了 7日埋め戻し作業実施 10日平成18年度調査予定地（福童町遺跡6）の試掘調査を実施、遺跡の存在を確認 11日埋め戻し作業完了、道路建設課担当者立会いのもと現地引き渡し 以後、図面・遺物整理作業及び調査報告書作成業務を実施

〈福童東内畑遺跡〉

平成18年3月7日調査区内に3箇所の下水管敷設工事を実施するため工事立会、調査区全域に複数の溝状遺構（中世～近世）が存在することを確認 4月12日本調査開始、Ⅰ・Ⅱ区の重機による表層土除去開始（～14日） 17日人力による遺構検出及び

掘削開始、以降随時個別遺構図・土層断面図・遺物出土状況図等を作成、遺構写真撮影を実施　28日Ⅰ・Ⅱ区の遺構掘削完了、写真撮影用清掃　29日Ⅰ・Ⅱ区全景写真撮影　5月1日Ⅰ・Ⅱ区全体図作成、個別遺構図作成　8日Ⅰ・Ⅱ区埋め戻し作業及びⅣ区表層土除去開始（～12日）　15日Ⅳ区人力による遺構検出及び掘削開始、以降随時個別遺構図・土層断面図・遺物出土状況図等を作成、遺構写真撮影を実施　31日Ⅳ区の遺構掘削完了、写真撮影用清掃　6月1日Ⅳ区全景写真撮影　2日Ⅳ区全体図作成、個別遺構図作成　6日Ⅳ区埋め戻し作業及びⅢ区表層土除去開始（～7日）　12日Ⅲ区人力による遺構検出及び掘削開始、以降随時個別遺構図・土層断面図・遺物出土状況図等を作成、遺構写真撮影を実施（これ以降雨のため作業が停滞）28日Ⅲ区の遺構掘削完了　29日写真撮影用清掃、Ⅲ区全景写真撮影　30日Ⅲ区全体図作成　7月3日埋め戻し・防護フェンス撤去作業実施、機材撤去（～5日）　5日道路建設課担当者立会いのもと現地引き渡し　以後、図面・遺物整理作業及び調査報告書作成業務を実施

〈福童町遺跡6〉

平成18年7月10日防護フェンス設置、Ⅰ・Ⅱ区の重機による表層土除去作業開始（～14日）（この後降雨のため人力掘削の延期が続く）　24日Ⅰ区人力による遺構検出及び掘削開始　25日Ⅱ区人力による遺構検出及び掘削開始、以降随時個別遺構図・土層断面図・遺物出土状況図等を作成、遺構写真撮影を実施　8月4日Ⅰ・Ⅱ区の遺構掘削完了　7日写真撮影用清掃、Ⅰ・Ⅱ区全景写真撮影　8日Ⅰ・Ⅱ区全体図作成（～9日）　11日Ⅱ区重機による埋め戻し　14～16日お盆休み　17日Ⅰ区重機による埋め戻し、Ⅳ区表層土除去　21日Ⅲ区表層土除去、Ⅳ区人力による遺構検出及び掘削開始　24日Ⅳ区の遺構掘削終了　25日Ⅲ区人力による遺構検出及び掘削開始　9月8日Ⅲ区遺構掘削終了　11日写真撮影用清掃のち全景写真撮影　12日Ⅲ・Ⅳ区遺構配置図作成　19日埋め戻し・防護フェンス撤去作業実施（～21日）　21日道路建設課担当者立会いのもと現地引き渡し　以後、図面・遺物整理作業及び調査報告書作成業務を実施

遺跡地はいずれも平成17年12月より調査終了箇所から随時「下町西福童16号線」道路改良工事が実施され、現在は消滅している。

小郡中学校上空より調査区を臨む（平成18年6月1日段階）

①福童町遺跡4　②福童町遺跡6　③福童町遺跡2（平成15年度調査）　④福童東内畑遺跡

久留米市に至る南側と佐賀県鳥栖市に至る西側は、緩やかに下って平野部となる。現在は本田の割合が高く、農業用水路が縦横無尽に張り巡らされている。戦前までは多くの土地が畑として使用され、調査区も桑畑・タバコ畑であった。また、この地域は宝満川の水面よりも標高が低いことから、堤防の改良工事が行われるまで頻繁に洪水に襲われた。昭和の水害はもとより、近世の文書類にも水害の記録が残っている。その一方で地下水が豊富な地域でもあり、今でも生活用水として井戸水を使用する家庭が多い。調査区周辺の地盤は弱く、宅地化する場合はベタ基礎もしくは改良工事を実施している。

Ⅱ．位置と環境

小郡市域は北から南へ流れる宝満川によって二分され、右岸には北西部に背振山系から派生する丘陵（通称・三国丘陵）があり、これが南へ行くに従い緩やかに下って平坦な台地へ移行し、筑後平野へ連なっている。左岸は北東に所在する花立山（城山）を頂点として南へと下り、同じく筑後平野に至る台地が延びている。本書で報告する福童町遺跡・福童東内畑遺跡は、右岸の台地南端、舌状に張り出す低位段丘の南西裾に位置している。遺跡の東隣には西福童区集落の中心部があり、西は約300mで佐賀県鳥栖市・基山町との県境（旧・筑後・肥前国境）に至る。律令制期にはこの境界に沿って大宰府から薩摩国府に至る駅路が設置されており、近接する西福童区には古くから交通の要衝として重要視されていたと考えられる。

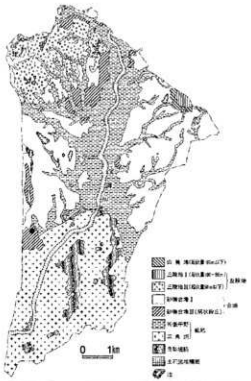
「福童」の地名そのものは「福堂」「福同」の文字で南北朝期の文献から登場し、とりわけ中世戦記文学『太平記』に記された合戦で著名である。近年は宅地造成や道路改良工事に伴う発掘調査が頻繁に実施され、考古資料からも歴史的様相の復元がなされつつある。ここに報告する3遺跡においては、弥生・中世～近世に渡る遺構・遺物が確認されており、西福童区内の集落縁辺部の状況が明らかとなった。以下、周辺地域に分布する遺跡を中心に歴史的環境の概要を記す。

旧石器・縄文時代については、明確にこの時期の所産と判断できる遺構は確認されていない。但し遺物は散見されることから、この段階から生活圏として土地利用がなされていたようである。

弥生時代については、寺福童遺跡5（6）で柳葉式磨製石鏃を伴う前期の木棺墓や中期を主体とする甕棺墓群が検出されている（平成18年度報告書刊行）ほか、発掘調査は実施されていないが、寺福童地内を南北に縦断する県道小郡久留米線（現・市道中町寺福童208号線）工事の際にも多数の甕棺が確認されている。また寺福童遺跡4（8）では中期の中広形銅戈9本が埋納された状態で確認された。これらの墓域や埋納遺構を形成した集団の集落は未確認であり、弥生時代の集落遺跡が密集する市北部の三国丘陵や小郡・大板井との関連も含めて、今後の周辺の調査に期待される。

古墳時代に入ると、福童町遺跡1（15）において初頭から集落が営まれ始める。同時期の墓域としては方形周溝墓4基が検出された寺福童遺跡1（10）が存在する。両者からは外来系の古式土師器が出土しており、小郡市域と畿内との関係を考える上で興味深い。また西鉄天神大牟田線を隔てた東の平地部に位置する大崎小園遺跡（17）においても集落が確認されている。古墳時代後期～末期にかけては、墓域として刀子や耳輪を伴う土壙墓が検出された寺福童内畑下道東遺跡(9)が確認されている。集落に関してはこれより若干新しくなるが、同遺跡において掘立柱建物が、寺福童遺跡4において竪穴住居群が検出されている。今回報告する3遺跡においても遺構は確認されなかったが、同時期の遺物が散見されることから、集落が営まれていた可能性が高い。

奈良時代には寺福童遺跡2（11）・3（7）で若干の遺構・遺物が確認

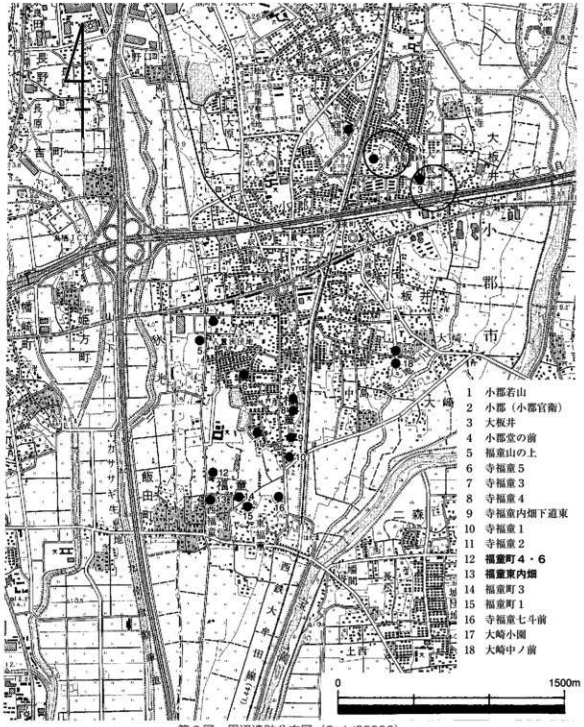


第1図　小郡市地形図

第2図　調査区位置図（S=1/2500）

されているが、集落の様相や規模を覗わせるほどの資料ではない。奈良時代末期から平安時代にかけての生活痕跡はこれまでの発掘調査では未確認である。しかし西福童区は律令期の条里痕跡が確認されている地域であり、前述のとおり大宰府～薩摩国府・肥前国府を結ぶ西海道に近接していることからも、今後の調査でこの時期の遺構・遺物が検出されることを期待したい。

鎌倉時代に関しては福童山の上遺跡２・３（5）で掘立柱建物１棟と溝が、福童山の上遺跡４（5）で道路状遺構や土坑、井戸が検出され、龍泉系青磁や白磁等が出土している。近世の遺構としては寺福童遺跡２で集落域の区画と思われる溝が検出されている他、佐賀県境に近い福童山の上遺跡１（5）においても機能こそ不明だがこの時期の溝が確認されている。



第３図　周辺遺跡分布図（S=1/25000）

Ⅲ．福童町遺跡４の遺構と遺物

(1) 調査の概要

調査対象地の中央に南北方向のコンクリート造用水路が設置されているため、調査区を東西に二分して設定した。東側をⅠ区、西側をⅡ区としている。遺構検出面は標高11.8～12.0mの基盤層（褐色ローム）だが、Ⅰ区のみこの上層（褐色土）から５条の溝状遺構の掘り込みが認められた。

地形は北から南へと緩やかに傾斜しており、Ⅱ区は南東隅が局地的に低まることから、現存する用水路及び道路部分には小規模な谷地形があったと想定される。検出面上面には、この地域の鍵層とされる黒ボク土が約10～20cmの厚さで部分的に堆積している。同様の土は近接する福童町遺跡２（小郡市報告書207集）や本書で報告する福童町遺跡６・福童東内畑遺跡でも確認されている。

調査区内では土坑２基、溝状遺構13条と木棺墓１基を検出した。各遺構の時期は下記のとおりである。

弥生	：	SD10・SD11・SD13	鎌倉	：	SD01・SD02・SD07
古墳	：	SD09			SK01・SK02
奈良	：	SD12	江戸	：	SD03・SD04・SD05・SD06・SD08

(2) 遺構と遺物

《弥生時代の遺構》

SD10（第５・６図/図版３）

Ⅱ区のほぼ中央を南から北へ流れる。幅1.0m・深さ0.4mを測り、断面はU字型を呈する。埋土はほぼ水平に堆積し、黒褐色シルトを主体とする。遺構底面には細い溝状の痕跡が残っており、流水を伴う溝であったと考えられる。掘削土搬出用のスロープに近い位置から、弥生時代の甕が３個体分まとまって出土している。遺構床面の直上で多量に検出しており、この溝が放棄された時点のものと思われる。

出土遺物（第４・８図/図版８）

17は弥生土器の高杯。外面にヨコミガキを施す。18～20は弥生土器の甕。頸部がくの字型に屈曲し、口縁端部に刻目を施す。18は内面に不定方向の指ナデ、19は内外面に丁寧な指ナデを、20は内外面に指ナデと工具によるナデを併用している。遺物は全体に摩滅が激しく、あばた状の破損が見られる。いずれも中期末の所産。

SD11（第５・６図/図版３）

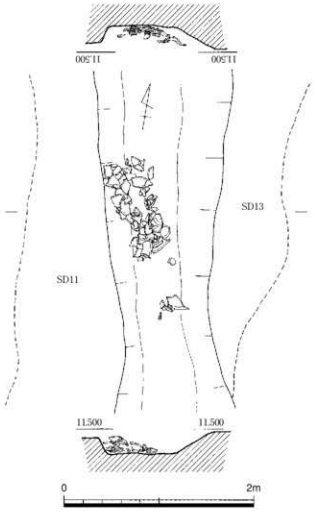
Ⅱ区西よりに位置し、南北方向にSD10･13と並走して流れる。SD10に切られる。幅0.8mを測る。上部は大幅に削平されており、元は断面U字型を呈していたと考えられる。

遺物は出土していない。

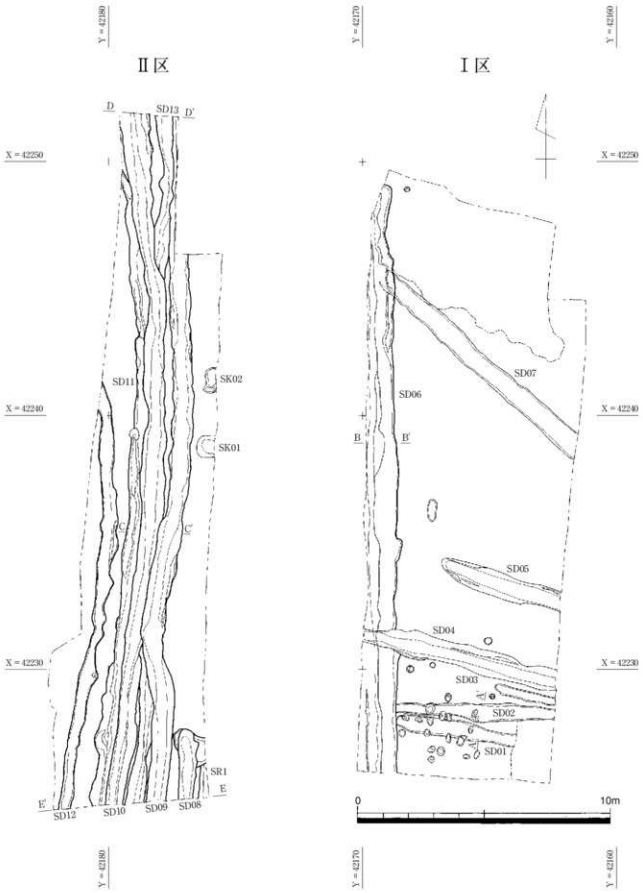
SD13（第５・６図）

Ⅱ区中央に、SD10・11と並走して北から南へ流れる。SD09・10に切られる。SD11との先後関係は不明。幅0.7m・深さ0.2mを測る。上部は削平されているが、元は断面U字型と考えられる。埋土は褐色土を主体とし、水平に堆積する。

極めて微量の土器が出土しているが、いずれも細片のため時期の特定は困難である。



第４図　10号溝状遺構遺物出土状況



第５図　福童町遺跡４　遺構配置図（S=1/150）

《古墳時代の遺構》

SD09（第５・６図／図版２・３）

Ⅱ区のほぼ中央を南から北へ流れる。幅0.9m･深さ0.4mを測り､断面はV字型を呈する。東西両岸に部分的にではあるが幅0.2mの浅いテラスをもつ。埋土はにぶい黄褐色を主体とし、水平に堆積する。比較的しまりが良く、同色で質の類する土が多いことから、人為的な埋め戻しをした可能性が高い。SD10・13を切る。

出土遺物（第８図／図版８）

少量の土器片が出土している。13・14は土師器の甕。外面タテハケ、内面ヨコケズリ調整。15は土師器の杯蓋。焼成が悪く全体に調整は不明。16は須恵器の瓶類。内外面とも回転ナデ調整で、内面下部に叩き痕が、外面には降灰による自然釉の付着が見られる。いずれの遺物も破断面を含めて摩滅が激しい。

《奈良時代の遺構》

SD12（第５・６図／図版３）

Ⅱ区西端を南から北へ流れ、東へ若干カーブする。幅0.5m・深さ0.1mを測り、断面はU字型を呈する。埋土は検出面上面に堆積しているものと同種の黒褐色シルトである。自然に埋没したと考えられる。

微量の土師器片が出土しているが、細片のため図示はしていない。

《鎌倉時代の遺構》

SK01（第７図）

Ⅱ区中央東寄りに位置する。東西0.7m以上・南北0.9m・深さ0.5mを測り、隅丸方形を呈する。用途は不明であるが、出土遺物がなく、埋土は黄褐色の地山ブロックを含む灰黄褐色土であったことから、廃棄土坑ではないと考えられる。

SK02（第７図）

SK01の北隣に位置し、長軸1.0m・短軸0.6m以上・深さ0.2mを測る。隅丸方形を呈し、南側に小規模はテラスを有する。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色土を主体とし、出土遺物は皆無である。SK01と同種・一連の遺構か。

SD01（第５・６図／図版２）

Ⅰ区南端を東から西へ流れる。幅0.6m・深さ0.4mを測り、断面は長方形を呈する。埋土は灰黄褐色土を主体とし、水平に堆積している。

出土遺物は皆無であったが、この溝状遺構を切って上面に近世のピット群が検出されたこと、SD02と埋土が類似することから、中世の所産と判断した。

SD02（第５・６図／図版２）

Ⅰ区南寄りを西から東へ流れる。幅0.7m・深さ0.4mを測り、断面は長方形を呈する。埋土は灰黄褐色シルトを主体とし、水平に堆積している。西端でSD06に切られる。SD01との先後関係は不明である。

出土遺物（第８図／図版８）

遺構の検出時に１の黒色土器の椀が出土している。内面のみが黒く、ヘラ状工具で丁寧なナデ調整を施す。胎土は極めて精良である。外面は激しく摩滅しており調整は不明、高台は貼付で端部が破損している。鎌倉時代初頭の製品と思われる。

SD07（第５図／図版２）

Ⅰ区北寄りを北西から南東へ流れる。幅1.2m・深さ0.2mを測り、断面は整った長方形を呈する。北西端はSD06に切られる。この溝状遺構のみが他の遺構とは異なって、現在の道路及び用水路と並走あるいは直行しない。

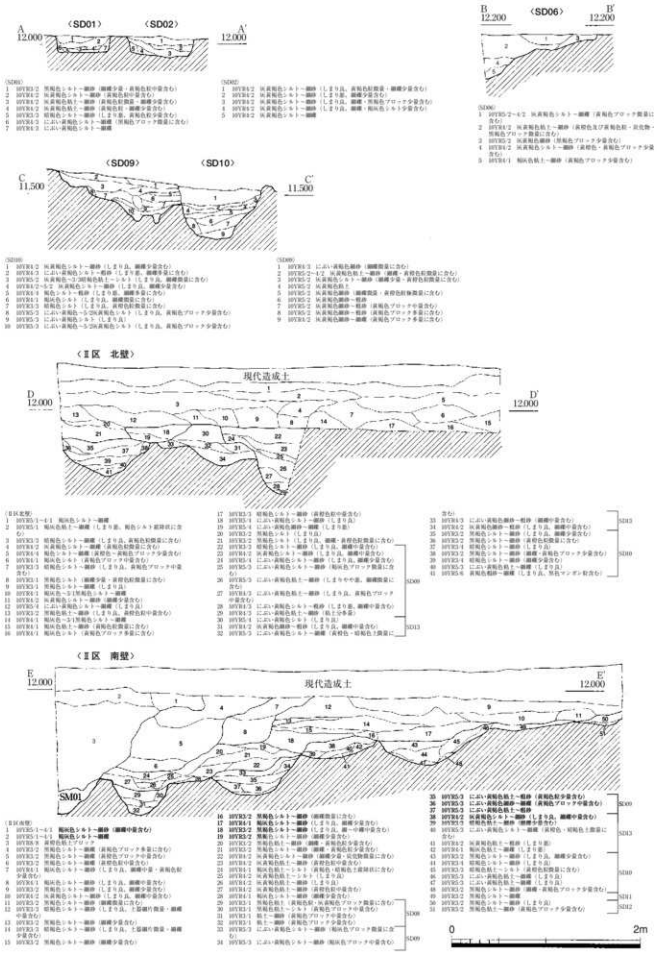
出土遺物（第８図／図版８）

12の瓦質の擂鉢が出土している。外面は粘土帯を積み上げて成形したのち指オサエとタテハケで調整、内面はナナメハケで調整したのち３条１組の幅広の擂目を施している。口縁端部はハケで丁寧に調整している。焼成は悪く、白色･褐色部分が多く残る。鎌倉時代末の所産と思われる。この他にも若干の土師器片が出土しているが、細片のため図示はしていない。

《江戸時代の遺構》

SD03（第５・６図／図版２）

Ⅰ区南半部を東西に流れる。幅0.4m・深さ0.1mを測り、断面台形を呈する。溝底面のレベルは一定で、水を流す機能はなかったと考えられる。



第６図　福童町遺跡４溝状遺構土層断面図

SD04（第５図/図版２）

Ⅰ区南寄りを西から東へ流れる。幅1.0m・深さ0.5mを測り、断面は台形を呈する。北岸の中央部に小ぶりのテラスを持つ。西端でSD06を切っており、本調査区内で最も新しい遺構と思われる。SD05とは規模・底面レベル・方向がほぼ一致することから、関連する遺構と想定される。

出土遺物（第８図/図版８）

少量の土器片・陶磁器片が出土している。２は磁器の皿で見込み部分に草花文を施す。17世紀後半の肥前製品と思われる。３は土師質の土製品。内傾し、上部に刳り込み、外面の一部に被熱痕跡がある。置き台の一種か。

SD05（第５・６図/図版２）

Ⅰ区中央を東から西へ流れる。幅1.0m・深さ0.5mを測り、断面台形を呈する。南北岸に部分的に小規模なテラスを有する。

埋土は灰黄褐色粗砂を主体とし、遺物は皆無であったが、SD04と規模・底面レベル・方向が一致することから、関連する同時期の遺構と判断した。

SD06（第５・６図/図版２）

Ⅰ区西端を北から南へ流れる。残存幅0.9m・深さは最大で0.5mを測る。Ⅳ章で報告する、福童町遺跡６のⅠ区SD01とは継続する一連の遺構である。断面はV字型を呈し、全体に幅0.6m程度の浅いテラスを持つ。埋土は灰黄褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しを行なったと見られる。調査中、遺構底面からは若干ではあるが常時の湧水が確認された。SD02・07を切り、SD04に切られる。現在の用水路と完全に並走しており、復元幅は2.0m超となることから、基幹水路の可能性が高い。

出土遺物（第８図/図版８）

微量の土器片・陶磁器片が出土している。４は土師質の鉢で内面をヨコハケで調整する。外面には若干だが煤の付着が見られる。５は土師皿、底部は回転糸切り。６は陶器の皿、緑灰色の釉を施す。17世紀代の肥前製品か。７は断面方形の鉄釘、先端に付着物が見られる。

SD08（第５・６図/図版２・３）

Ⅱ区南東に位置し、南から北へ流れる。幅0.6m・深さ0.4mを測り、断面はV字型を呈する。埋土は黒褐色土を主体とし、水平に堆積している。北端はある程度の深さをもって終了することから、土坑状の遺構の可能性もある。

出土遺物（第８図/図版４）

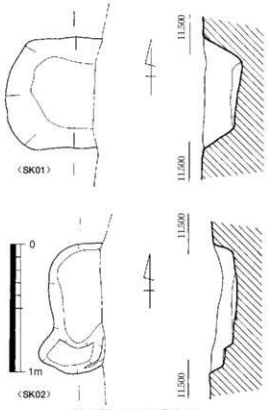
少量の土器片・陶磁器片が出土している。８は白磁椀、こってりと施釉がなされており、18世紀中頃の形状。肥前製品か。９は鉢崎式最終期の鉢類、把手部分が破損している。混入品だが、福童区内で明確に縄文時代と認定できる遺構は確認されていないため、参考に紹介しておく。10は土師質の土鍋、内面はヨコナデ調整、外面は被熱のため黒色化している。11は瓦質の火鉢、外面にスタンプ文様は施さない。江戸中期の所産と思われる。

《時期不明の遺構》

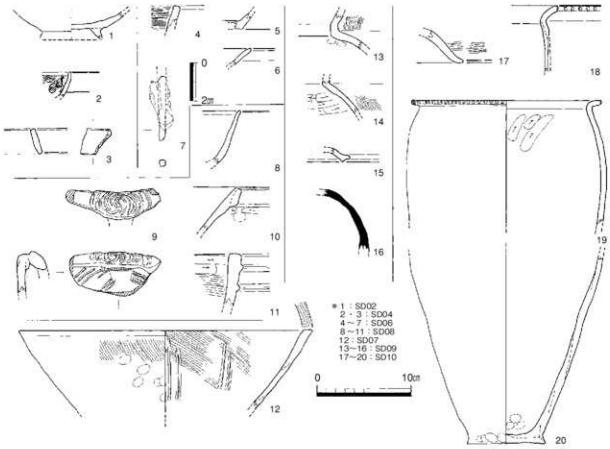
SM01（第９図）

Ⅱ区南東隅に位置する。遺構のほとんどが調査区外に延びるため規模は不明であるが、Ⅱ区南壁面で確認した土層断面の状況から木棺墓と判断した。埋土は黒褐色土を主体とし、遺物は微量の土師器細片を確認するのみである。

本遺跡が所在する福童区内においては木棺墓が確認された例はないが、隣接する寺福童区では弥生時代後期に木棺墓を営むことが明らかになっており、この時期の遺構である可能性は高い。



第７図　１・２号土坑



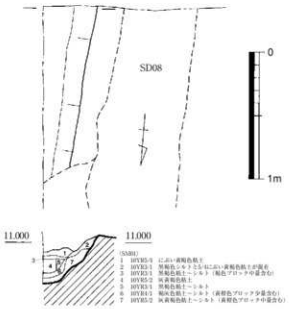
第８図　溝状遺構出土遺物（７のみS=1/2）

(3) 成果の概要

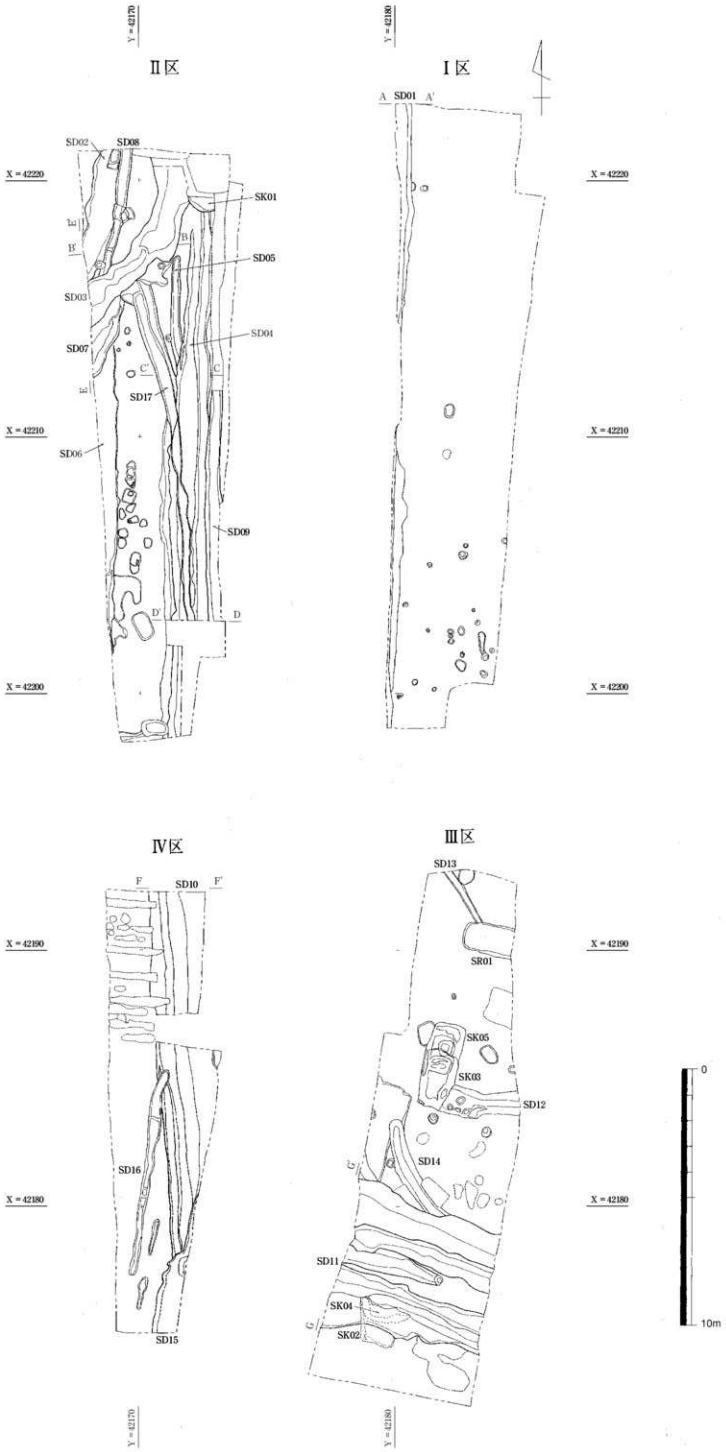
本遺跡では弥生時代から近世にいたるまでの遺構が確認されたが、そのほとんどが溝状遺構であり、調査区全域にわたって極めて遺物の出土が少ない状況であった。わずかに出土した遺物についても、溝状遺構の機能に伴うと思われる二次的な摩滅が激しく、住居や廃棄土坑といった当時の生活と密着したものとは考えがたい。但し、遺物の示す時期は多岐にわたることから、近接する地域には縄文時代から近世にいたるまでの生活域が存在していたものと考えられる。

また、東側のⅠ区は遺構検出面がほぼ平坦で、上面の黒色土の堆積も水平に近いのに対し、西側のⅡ区は北から南へ、東から西へ遺構検出面が傾斜しており、かつては現在の道路側に谷状の地形が存在していたことを示唆している。

以上の成果から、調査区は現在の寺福童区・西福童区が所在する低位段丘の西端傾斜部に相当し、弥生～近世にわたって西福童区の集落域の境界部分であった可能性が高いと考えられる。具体的な集落の状況については、今後本遺跡の東側での調査と、そこでの成果に期待したい。



第９図　木棺墓（S=1/30）



第10図　福童町遺跡６　遺構配置図（Ｓ＝1/150）

Ⅳ．福童町遺跡６の遺構と遺物

(1) 調査の概要

調査対象地を東西に分断する形でコンクリート造の用水路が、南北に分断する形で農道が設置されていたため、調査区をⅠ～Ⅳ区に四分割して設定した。各調査区の番号は第10図に示したとおりである。

遺構検出面は標高11.8～12.0mの基盤層（褐色ローム）であり、Ⅱ区で東から西へ傾斜を持つ以外はほぼ平坦である。Ⅲ章で報告した福童町遺跡４と検出面のレベルに大差はないが、本遺跡においては遺構面検出時および遺構掘削時、調査区壁面や遺構底面から頻繁に湧水が確認された。特にⅡ区ではその傾向が強く、調査の円滑な進行のため、Ⅱ区北東隅には湧水誘導用の土坑と、そこへ他の箇所からの湧水を流し込むための排水路を人為的に掘削している。検出面上面には、この地域の鍵層とされる黒ボク土が約20cmの厚さで全体に堆積しているが、この中に遺物は含まれていない。

調査区内では溝状遺構13条を検出している。各遺構の時期は下記のとおりである。

古墳	：	SD12・SD13	鎌倉	：	SK02・SK04
奈良	：	SK03・SK05	江戸	：	SK01
		SD02・SD05・SD17・SR01			SD01・SD03・SD06・SD07・SD08
平安	：	SD04・SD10・SD09			SD11・SD16

(2) 遺構と遺物

《古墳時代の遺構》

SD12（第10図／図版６）

Ⅲ区中央を西から東へ流れる。SK03に切られ、それより西側へは続かない。遺構底面にピット状の痕跡を確認したが、溝状遺構に伴うものかは不明である。幅0.9m・深さ0.3mを測り、断面はV字型を呈する。埋土は黒褐色シルトを主体とする。

土師器片が少量出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

SD13（第10図）

Ⅲ区北端を北西から南東へ流れる。SR01に切られ、それより南側へは続かない。幅0.2m・深さ0.1mを測り、断面台形を呈する。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とし、出土遺物は確認されなかった。

《奈良時代の遺構》

SK03（第11図／図版７）

Ⅲ区中央に位置し、SK05・SD12に後出する。長軸2.3m・短軸1.4m・深さ最大0.65mを測り、不整長方形を呈する。底面北寄りにピット状の落ち込みを持つ。埋土は黒褐色シルトを主体とし、水平堆積を基本とする。しまりは良く、人為的な埋め戻しを行なったと考えられる。

土師器片が少量出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SK05（第11図／図版７）

Ⅲ区中央に位置し、SK03に切られる。南北残存長1.1m・東西1.4m・深さ最大0.5mを測り、元は不整長方形を呈すると思われる。埋土は黒褐色シルトを主体とし、水平堆積の様相を示す。SK03と類似する形状・埋土であることから、比較的時期の近い、同種の遺構と考えられる。

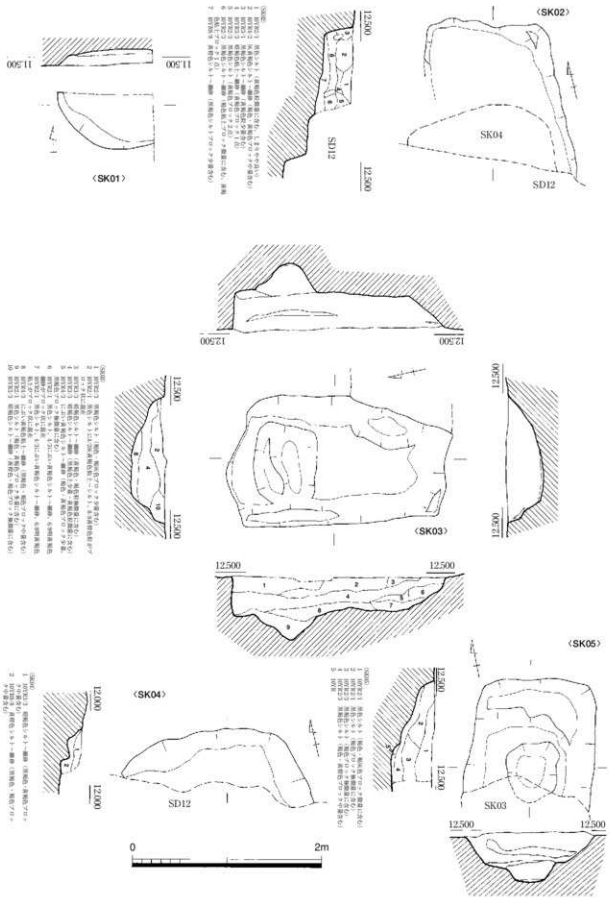
出土遺物は土師器の小片が少量のみであった。

SD02（第10・13図／図版５）

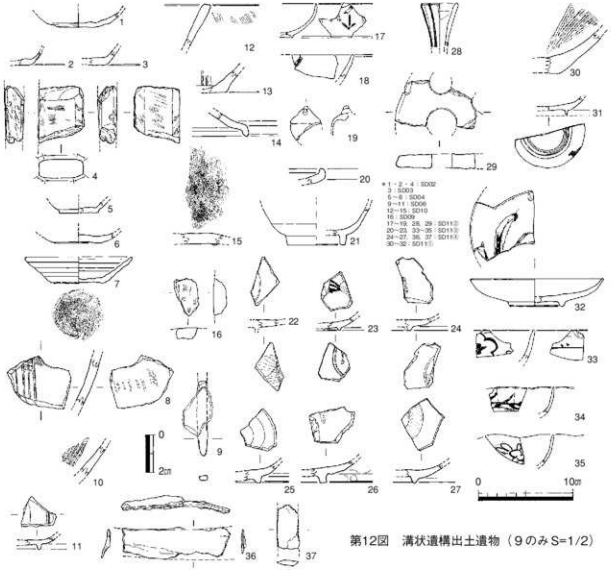
Ⅱ区北西隅を北から南へ流れる。幅1.0m・深さ0.3mを測り、断面台形を呈する。SD08に切られる。埋土は灰黄褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。全体にしまりが悪く、自然に埋没したと考えられる。調査区北・西へ延長するが、福童町遺跡4の調査においてはこれと対応する溝状遺構は検出されていない。

出土遺物（第12図／図版８）

少量ではあるが土器片・石器類が出土している。１・２は土師器の杯身。外面は回転ナデ、内面下部は指ナデを施す。底部は回転ヘラ切り。４は片岩製の砥石。四面を使用している。



第11図　1・2・3・4・5号土坑



第12図　溝状遺構出土遺物（9のみS=1/2）

SD05（第10図/図版5）

Ⅱ区北寄りを南から北へ流れる。SD04に切られる。幅0.4m・深さ0.2mを測り、断面台形を呈する。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とし、しまりは良い。

極微量の土師器片が出土しているが、細片のため図示は控えた。

SD17（第10・13図/図版6）

Ⅱ区中央を北から南へ流れる。SD04に切られる。幅0.4m・深さ0.7mを測り、断面台形を呈する。埋土は灰黄褐色を主体とし、全体にしまりが悪く、底面に粒子の粗い土が堆積していることから、水流を伴う溝で自然埋没したと考えられる。

微量の土師器片が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

SR01（第14図/図版7）

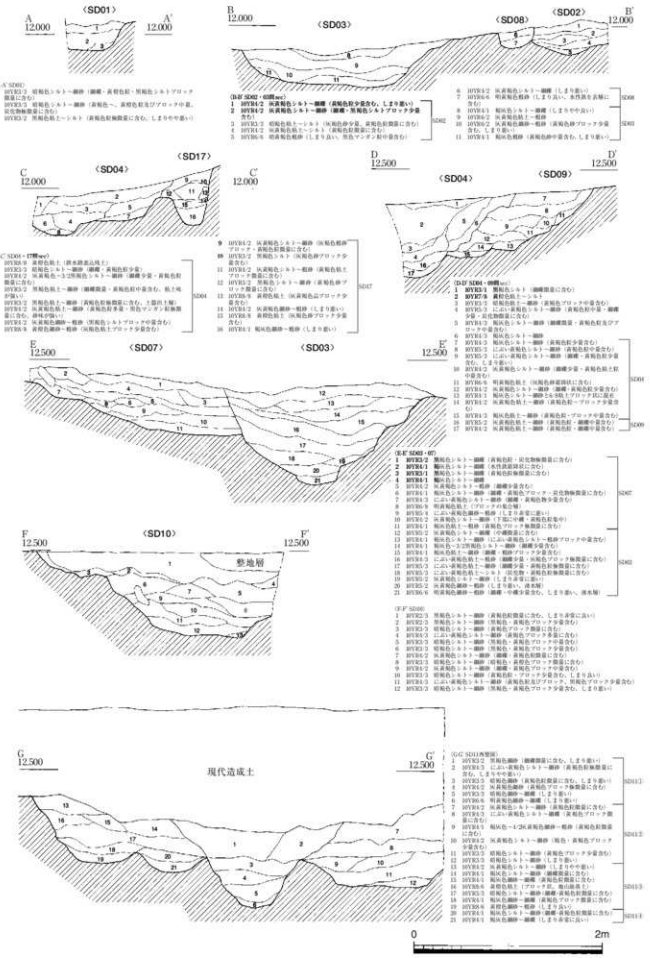
Ⅱ区北寄りに位置し、長軸1.8m・短軸1.0m・深さ0.2mを測る。平面プランは隅丸長方形を呈し、底面には掘削時の工具痕と見られる凹凸が多数確認された。埋土は黒褐色土を主体とし、しまりは良い。

出土遺物は皆無であった。

《平安時代の遺構》

SD04（第10・13図/図版5）

Ⅱ区東寄りを南から北へ流れる。SD09・05・17を切る。幅1.7m・深さ0.6mを測り、断面V字型を呈する。西岸に浅いテラスを持つ。埋土は灰黄褐色土を主体とし、遺構壁面の堆積状況から人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。調査区北端へ延長すると見られるが、福童町遺跡4においてこれと連続する溝状遺構は検出されていない。南へ延長する部分はⅣ区で検出したSD10と連続する。



第13図　福童町遺跡６溝状遺構土層断面図

出土遺物（第12図／図版８）

少量の土器が出土している。５・６・７とも土師器の杯身。内外面ともに回転ナデを施し、底部は回転糸切り痕が見られる。８は瓦質の擂鉢。外面はタテハケ、内面はヨコハケの後４条以上１組の擂目を施す。焼成は悪く、黄橙色部分が各所に残る。

SD09（第10・13図／図版５）

Ⅱ区東端を南から北へ流れる。北半部は導水用の排水路のためやむなく削平したが、調査区北辺の土層断面観察から北へ延長することを確認している。但し福童町遺跡４において連続する溝状遺構は確認されていない。幅0.9m・深さ0.2mを測り、断面台形を呈する。上部はSD09の掘削時に削平されている。埋土は灰黄褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しを行なった様相を示す。

出土遺物（第12図）

少量の土器片・石器類が出土している。土器片はいずれも細片のため図示は控えた。16は流文岩製の砥石。研磨面１面の破片のみの出土である。

SD10（第10・13図／図版６）

Ⅳ区東寄りを北から南へ流れる。SD15・16に切られる。残存幅2.3m・深さ0.9mを測り、断面Ｖ字型を呈する。西岸に浅いテラスを持つ。埋土は上面が黒褐色、中・下面は灰黄褐色土を主体とし、全体にしまりの良い水平堆積の様相を示す。遺構の規模・底面レベル・埋土の様相と位置から、Ⅱ区SD04と連続する一連の遺構と考えられる。

出土遺物（第12図／図版８）

少量ではあるが土器片が出土している。12は瓦質の鉢。外面にわずかにナナメハケが確認できる。焼成は悪く、黄褐色部分が各所に残る。13は瓦質の擂鉢。内外面とも工具でヨコナデを施し、３条以上１組の擂目を刻んでいる。14は青磁の蓋。オリーブ灰色の釉薬を厚めに施している。15は須恵器の杯身。混入遺物と見られるが参考のため掲載した。内面に浅いヘラ記号が残る。いずれの遺物も破断面を含めて二次的な摩滅が激しい。

《鎌倉時代の遺構》

SK02（第11図／図版７）

Ⅲ区の南端に位置し、SK04・SD11に切られる。南北残存長1.4m・東西1.3m・深さ0.4mを測り、平面プランは不整方形を呈する。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積を基本とする。

極微量の土師器片が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SK04（第11図／図版７）

Ⅲ区の南寄りに位置し、SK02を切り、SD11に切られる。上面はSD11掘削時に大幅に削平されている。南北残存長0.6m・東西残存長1.9m・深さ0.2mを測る。平面プランは隅丸方形を呈すると思われる。埋土は暗褐色土を主体とする。

微量の土師器片が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

《江戸時代の遺構》

SK01（第10図）

Ⅱ区北東隅に位置し、SD03・04を切る。北・東端部は導水用の土坑・排水路の掘削のためやむなく削平したが、調査区北辺の土層断面観察により、調査区北へ延長しないことを確認している。南北残存長0.6m・東西残存長1.1m・深さ0.3mを測り、平面プランは円形を呈すると考えられる。

出土遺物は皆無であった。

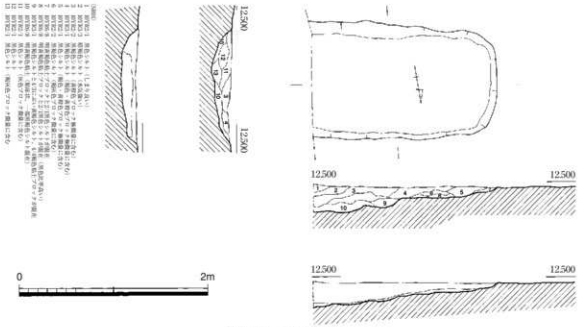
SD01（第10図／図版５）

Ⅰ区西端を北から南へ流れる。残存幅0.6m・深さ0.3mを測り、断面Ｖ字型を呈する。福童町遺跡４のⅠ区で検出したSD06と連続する一連の溝状遺構。埋土は暗褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しを行なった様相を示す。本遺跡で検出したのはほとんどが溝状遺構のテラス部分であった。

極微量の陶磁器片が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SD03（第10・13図／図版５）

Ⅱ区北寄りを北東から南西へ流れる。SD02・06・07・08を切る。本遺跡でもっとも新しい遺構と考えられる。底面中央部に段差を持つ。調査区北・西へ延長するが、福童町遺跡４においてこれと連続する溝状遺構は検出されていない。幅1.5m・深さ0.5mを測り、断面Ｖ字型を呈する。埋土は褐灰色・灰黄褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。



第14図　1号土壙墓

出土遺物（第12図）

極微量であるが土器片が出土している。3は土師器の皿で底面に回転糸切りの痕跡が見られる。

SD06（第10図/図版6）

Ⅱ区西端を南から北へ流れる。SD07に切られるが、これより北へは延長しない。残存幅0.9m・深さ0.15mを測り、断面台形を呈する。

出土遺物（第12図）

微量ではあるが、陶磁器片が出土している。9は鉄製の釘状製品。断面は長方形。10は陶器の擂鉢。4条1組の擂目を施す。17～18世紀代の肥前製品か。11は白磁染付の皿。見込み中央に輪状の釉ハギを施す。17世紀前半の肥前製品か。

SD07（第10・13図/図版6）

Ⅱ区中央西寄りに位置し、北東から南西に流れる。南東岸にテラスを持つ。SD03に切られるが、方向・規模・底面レベルが類似している。同じ機能を持つ溝を掘り直したものか。残存幅1.0m・深さ0.5mを測り、断面はV字型を呈する。埋土は黄褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しを示唆する水平状の堆積を示す。

微量の陶磁器が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SD08（第10・13図/図版5）

Ⅱ区北寄りを南から北へ流れる。SD02を切り、SD03に切られる。南側への延長状況およびSD06との先後関係は不明である。幅0.4m・深さ0.25mを測り、断面は台形を呈する。埋土は黄褐色土を主体とし、自然埋没と見られる水平堆積の様相を示す。

極微量の土器片が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

SD11（第10・13図/図版6）

Ⅲ区南側を東から西へ流れる。SK02・04・SD14を切る。遺構底面のレベルが他と比較して著しく低いためか、遺構掘削段階から激しい湧水があり、遺構の完掘までに底面および側壁の一部が侵食を受けた。本報告書に掲載している平面図は完掘後の状況であるため、遺構が構築された当時の形状を示していないことをここにお断りしたい。土層断面については、測図時に溝状遺構の埋土であると確実に認識できる部分のみを図化している。

遺構検出時は1条の幅広の溝状遺構と認識していたが、掘削後に先後関係のある4条の溝状遺構が並行して掘削されていると判明した。いずれの溝状遺構も近世の所産である。中央部（SD11－①）のものが最も新しく、その北側に1条（SD11－②）、南側に2条（南端がSD11－③、北がSD11－④）存在する。SD11－①は幅1.9m・深さ0.8mを測り、断面はV字型を呈する。埋土は暗褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。SD11－②は残存幅1.5m・深さ0.7mを測り、断面台形を呈する。埋土は灰黄褐色土を主体とし、水平堆積を基本とする。SD11－③は残存幅1.5m・深さ0.8mを測り、断面台形を呈する。埋土は褐灰色を主体とし、水平堆積を基本とする。SD11－④は③に上部を大幅に削平されているが、残存幅0.6m・深さ0.25m、断面U字型を呈する。

遺構底面に粒子の粗い土が堆積し、底面には浅い溝状痕跡が残ることから、流水を伴う溝であったと考えられる。SD11－②・③各溝の先後関係は不明である。

いずれも比較的規模の大きい溝だが、Ⅳ区に連続する一連の遺構は確認されなかった。但しSD11－②が調査不可能であった現用水路部分で90度屈曲し、Ⅳ区のSD15に連続する可能性は否定できない。

出土遺物（第12図/図版8）

小片ではあるが比較的まとまった量の陶磁器と、少量の鉄製品が出土している。30は陶器の擂鉢。無釉の焼締系で底部は回転糸切り、外面はロクロ引き上げに伴う凹凸が残り、内面に8条1組の擂目を施す。擂目は使用により摩滅している。31は磁器染付の椀。17世紀代末の肥前製品か。32は磁器染付の皿。畳付のみ釉ハギを施す。見込みに輪状の釉ハギや窯道具痕は確認できない。残存部分に野菜文。17世紀後半の肥前製品。以上がSD11－①から出土している。

17は色絵磁器の小椀。有田焼柿右衛門様式の初期段階。18は磁器染付の椀。17世紀後半の肥前製品。19は土製の鈴。型押しの製品と思われるが内面の処理は粗い。28は磁器の瓶類。ケズリ調整により花弁状の文様を施した後、紺と緑で彩色している。須恵焼か。29は七輪の敷皿。胎土は粗く、片面に砂粒が焼き付いている。以上はSD11－②からの出土遺物である。

20は陶器の皿。赤褐色の胎土に黄褐色釉を施す。21は陶器の椀。内外面に黄褐色の釉薬を施し、畳付部分のみ釉ハギを行なっている。肥前産か。22は陶器の皿。内面に輪状の釉ハギを、外面に花弁状の陽刻文を施し、黄褐色釉を掛け流す。23は陶器の椀。精良な胎土で薄い造り、内面に山水文を、高台内に窯元名称「有□水」のスタンプを押している。京焼風の肥前製品。33は磁器染付の椀。17世紀代の肥前製品。34・35は磁器染付の皿。型押し成形の製品で見込み部分のみに草花文を施す。17世紀後半の肥前製品。これらはSD11－③からの出土遺物。

24は青磁の皿。内面および高台部分に砂目が残る。25は陶器の皿。釉は黄褐色で内面に輪状釉ハギを施す。17世紀後半の肥前製品。26は陶器の皿。見込み部分に砂目痕跡。27は磁器染付の皿。内面に輪状釉ハギを施しており、砂粒が多量に残っている。17世紀前半の肥前製品。36は鉄製の鎌刃。複数枚の鋼板を叩き合わせたものか。37は用途不明の鉄製品。農具の刃部か。以上がSD11－④の出土遺物であるが、この他にも埋土からは輪羽口状の粘土塊片が出土している（図版8）。

SD14（第10図/図版7）

Ⅲ区中央を北から南へ流れる。SD11に切られるが、これより南へは延長しない。幅0.8m・深さ0.6mを測り、断面はV字型を呈する。埋土は灰黄褐色土を主体とし、流れ込みによって埋没したと見られる。

出土遺物は皆無であった。

SD15（第10図）

Ⅳ区南東隅を南から北へ流れる。SD10を切る。残存幅1.0m・深さ0.8mを測り、断面台形を呈する。埋土は灰黄褐色土を主体とし、流れ込みによって埋没したと見られる。

遺物は全く出土していない。

SD16（第10図/図版6）

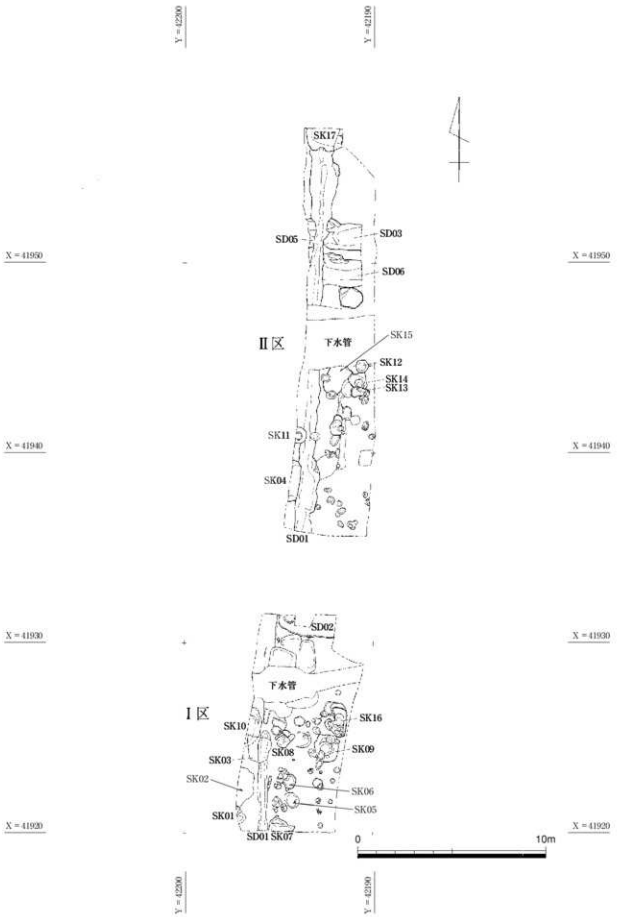
Ⅳ区西寄りを北から南へ流れる。幅0.4m・深さ0.1mを測り、断面はU字型を呈する。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とする。

出土遺物は皆無である。

(3) 成果の概要

本遺跡では合計16条と多数の溝状遺構が検出されている。しかし、これらの多くは調査区外へ延長しているにも関わらず、時期・規模・底面レベルから検討した結果、北に隣接する福童町遺跡4で検出された溝状遺構とは連続しないことが明らかになった。また、福童町遺跡4で検出され、南へ延長する溝状遺構の続きも、双方の遺構検出面のレベルに大差はなく、中世以前の溝状遺構については後世の造成によって削平された可能性も低いが、一部を除いて確認できていない。

調査区内は複数の溝状遺構が近接して交錯した状況にあり、調査区壁面の土層断面を確認する限り、同位置に複数の溝状遺構を繰り返し掘削している経過が見て取れる。これは福童町遺跡4でも同様である。本遺跡の所在する場所は、低位段丘から沖積地へと地形が変化し、谷地形への変換点という意味で何らかの区画施設を設置してもおかしくはない箇所であるが、それだけではなく、東西・南北の双方が集落あるいは土地利用の面での重要な境界であり、そのために長期にわたって繰り返し溝状遺構を構築した可能性があると想定される。



第15図　福童東内畑遺跡　Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図（1/200）

Ⅴ．福童東内畑遺跡の遺構と遺物

(1) 調査の概要

調査は、現在の道路および側溝と並行して全長100m・幅約10mのトレンチを掘削するような状態で行なった。但し、調査区東側は住宅地であり、現行道路から進入路の確保と、電気・上下水道関連の地下敷設物の存在があったことから、各住宅の地権者と個別に協議を行い、南北に四分割して調査を行なうことになった。調査順序はプレハブ設置箇所および廃土の仮置場の確保の問題から、Ⅰ・Ⅱ区→Ⅳ区→Ⅲ区の順で実施している。

遺構検出面は標高9.7～10.8mの基盤層で、Ⅰ～Ⅱ区は黄褐色砂質土、Ⅲ区は黄褐色粘質土、Ⅳ区は褐色ロームを基本とする。南から北へ緩やかな傾斜が見られるが、調査区の南に位置するⅠ・Ⅱ区の遺構は上部の削平が激しく、本来は南が高く北が低いわずかな比高差のある地形であったと考えられる。またⅠ区においては、遺構検出面の下にも同質・同色の砂質土・粘質土の互層が見られた。この面では遺構・遺物は確認されていない。この地域の鍵層である黒ボク土は、Ⅳ区の遺構検出面上面でのみ確認できた。

本遺跡は宝満川の水面よりも標高が低いためか、遺構検出面・遺構内部を問わず全体に湧水が激しく、調査は難航した。また隣接する住宅地の一部が現在でも井戸水を使用していることもあり、湧水により完掘が困難な遺構や井戸状遺構については、遺構の性格付けが可能になった時点で掘削を中断していることをここに断っておく。

調査区内では、溝状遺構13条（うちSD01はⅠ・Ⅱ・Ⅳ区にまたがるため章末に記述する）、土坑28基（SK04・25・26は欠番）、不明遺構14基、その他ピット群を検出している。遺構の時期は近世、特に17世紀半ばと18世紀後半を主体としている。

(2) 遺構と遺物

《Ⅰ区の遺構》

SK01（第16図／図版10）

調査区南西隅に位置し、長軸0.9m・短軸残存長0.5m・深さ0.3mを測る。平面プランは不整円形を呈する。埋土は褐灰色土を主体とする。出土遺物は認められなかったが、近接するSK02・03と埋土が酷似することから近世の所産と判断した。

SK02（第16図／図版10）

調査区南西寄りに位置し、長軸2.0m・短軸残存長0.8mを測る。平面プランは不整円形を呈する。掘削開始段階から激しい湧水があったため、途中で完掘を断念した。第16図には掘削断念段階の底面ラインを掲載している。廃棄土坑の一種と思われる。

出土遺物（第16図／図版16）

少量だが土器片が出土している。1は瓦質の釜類。板状工具を用いたナデ調整を施している。焼成は悪く、黄褐色部分が各所に残る。2は瓦質の羽釜。内面にはヨコケズリ・ヨコハケを施しているが、指ナデ等の痕跡も目立つ。羽部分から下には厚く煤が付着している。3は土師質の土鍋。内外面ともヨコナデ調整を施しており、外面には口縁端部から下方にべったりと煤が付着している。4は石造物の破片。仏教関連か。

SK03（第16図／図版10）

調査区中央西寄りに位置し、長軸1.3m・短軸残存長0.6mを測る。平面プランは不整方形を呈し、SD01に切られる。掘削開始段階から湧水が激しかったため、完掘を断念した。第16図には掘削断念段階の底面ラインを掲載している。廃棄土坑の一種と思われる。

出土遺物（第16図）

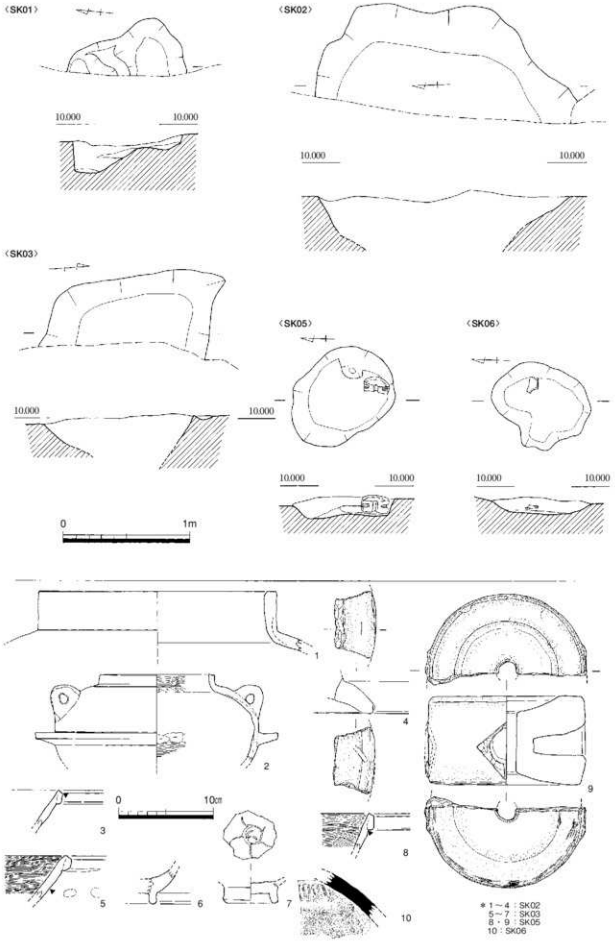
少量の土器片が出土している。5は土師質の土鍋。内面はヨコハケ、外面はナデ調整を施しており、外面体部中ほどから下方には薄く煤が付着している。6は青磁の椀。オリーブ灰色の釉が厚くかかっている。破断面を含めて全体に二次的な摩滅が激しい。7は陶器の椀。内部に陰刻文を施し、黄褐色釉をかけている。17世紀中頃の肥前製品。

SK05（第16図／図版10）

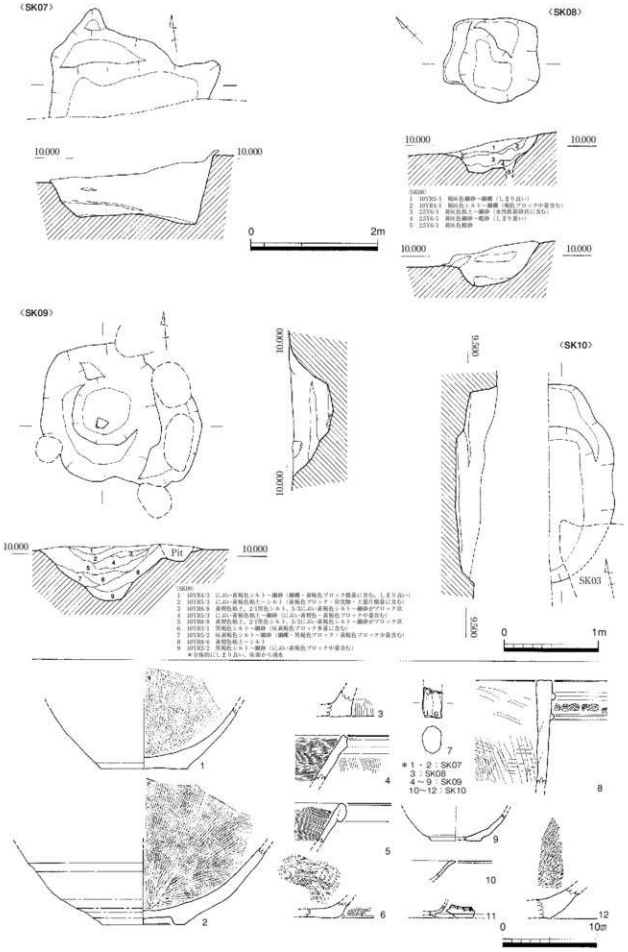
調査区南寄り中央に位置し、長軸0.8m・短軸0.7m・深さ0.2mを測る。平面プランは円形を呈する。上面は後世の造成によって大幅に削平されていると思われる。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（第16図／図版16）

微量の土器片と石製品が出土している。8は土師質の土鍋。内面にヨコハケ、外面にナデ調整を施し、口縁の折り返し部分の



第16図　1・2・3・4・6号土坑（1/30）及び出土遺物



第17図　7・8・9・10号土坑（7・8は1/30）及び出土遺物

下には煤が付着している。9は半裁された石臼。角閃石を多量に含む凝灰岩製。柄の差し込みのための刳り込みが2箇所あり、双方に菱形装飾が施されている。摺り面には刻みがないが、使用によるものか外側は研磨されており、内側は岩石内の鉱物が多量に抜け落ちた痕跡が見られる。遺構底面直上からの出土。

SK06（第16図/図版10）

調査区南寄り中央に位置し、長軸0.8m・短軸0.7m・深さ0.15mを測る。平面プランは不整円形を呈し、上面は後世の造成により削平されていると考えられる。

出土遺物（第16図）

床面直上から10の須恵器片1点のみが出土している。甕の体部で外面は叩きの後ヨコナデ調整を施しており、内面に平行線当て具痕が残る。

SK07（第17図/図版10）

調査区南端に位置し、長軸1.3m・短軸残存長0.7m・深さ0.6mを測る。平面プランは不整方形を呈し、北側に小規模なテラスを持つ。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物（第17図/図版16）

少量の陶磁器片が出土している。1・2は陶器の擂鉢。1は全面に褐色釉を施し、外面にはロクロ引き上げに伴う凹凸が、内面には12条1組の擂目が見られる。底部は回転糸切りと焼成時の胎土目を使用した重ね焼きの痕跡が残る。17世紀末の肥前製品。2は無釉の焼締陶器で、内面に12条1組の擂目を施し、削出高台を持つ。17世紀半ばの肥前製品。いずれの擂鉢も使用による擂目の摩滅が確認できる。

SK08（第17図/図版10）

調査区中央に位置し、長軸0.75m・短軸0.7m・深さ0.25mを測る、不整円形の土坑。埋土は黄灰色土を主体とし、人為的な埋め戻しがなされたと考えられる。

出土遺物（第17図）

極微量の土器片が出土している。3は弥生土器の甕片で混入遺物と考えられるが参考のため掲載した。

SK09（第17図/図版10）

調査区中央東寄りに位置し、長軸1.3m・短軸1.1m・深さ0.45mを測る。平面プランは不整円形を呈し、擂鉢状の構造を持つ。埋土は黄褐色・灰黄褐色砂質土を主体とし、段階を踏んで人為的に埋め戻したと考えられる。

出土遺物（第17図/図版16）

少量の土器片が出土している。4・5は土師質の土鍋。4は内面ヨコハケ、外面タテハケ調整を施す。5は内面のみヨコハケを施し、口縁端部内側から外面にかけて煤が付着している。6は瓦質の擂鉢と思われるが、極めて焼成が悪くほぼ黄橙色である。外面はタテハケ調整で、内面に4条1組の擂目を施す。7は瓦質の把手。調理具もしくは火鉢に伴うものか。8は瓦質の火鉢。内面にナデ消し忘れた不定方向の粗いハケメが残る。外面の二重突帯間に8の字型のスタンプ文様を施す。遺構底面直上からの出土。9は土師器の椀状製品。摩滅のため不明だが底面は回転糸切りと思われる。

SK10（第17図/図版10）

調査区中央西端に位置し、長軸1.7m・短軸残存長0.5m・深さ0.3mを測る。平面プランは楕円形を呈し、北側にテラスを持つ。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とする。SK03に切られる。

出土遺物（第17図）

少量の土器片が出土している。10は白磁の皿。口縁部外面に重ね焼きの影響と見られる釉薬の乱れが見られる。11は磁器染付の小椀。胎土はやや粗く、陶質磁器の可能性もある。12は陶器の擂鉢。無釉で焼き締めてある。底部は回転糸切り、内面に7もしくは8条1組の擂目を施す。17世紀代の肥前製品。

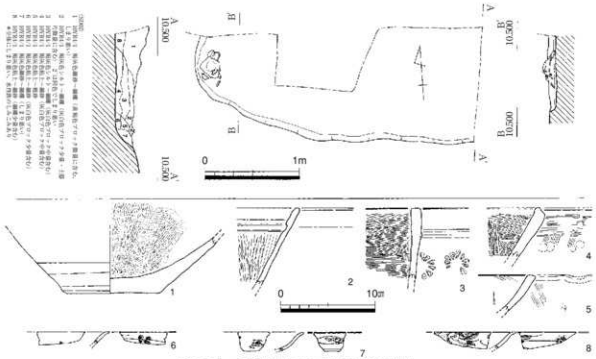
SK16（第19図/図版11）

調査区中央東寄りに位置し、長軸1.8m・短軸1.0m・深さ0.5mを測る。平面プランは不整形を呈し、北側に2段のテラスを持つ。埋土は黒褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しを行なった様相を示す。

微量の陶磁器片が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SD02（第18図/図版14）

調査区北端に位置し、東から西へ流れる。SD01を切る。残存幅1.2m、深さは最深0.35mを測り、断面は長方形を呈する。後



第18図　2号溝遺物出土状況及び出土遺物

世の造成で上部はかなり削平されている。埋土は褐灰色土を主体とし、全体に鉄分を含む。遺構底面が青緑色に変色していることも踏まえ、使用されていた時期には滞水していた可能性が高い。

出土遺物（第18図/図版16）

ある程度まとまった量の陶磁器片が出土しているが、SD01の遺物が混入している可能性もある。1は陶器の擂鉢。無釉の焼締陶器で、底部は回転糸切り、内面に7条1組の擂目を施す。2は口縁端部のみに鉄釉を施した陶器の擂鉢。内面に7条1組の細い擂目を施す。いずれも17世紀半ばの肥前製品。3は瓦質の火鉢。内面はヨコハケ、外面は突帯の下部に花弁状のスタンプ文様を施す。4・5は瓦質の擂鉢。外面はタテ・ヨコ両種のハケ調整を施し、内面はヨコハケの後4条1組の擂目を刻む。焼成は悪く白色部分が各所に見られる。5は口縁部に片口状の部分を持つ。6・7・8は磁器染付の皿。外面の草花文から同種もしくは同一個体の破片と考えられる。8の見込み部分にはウサギの文様が描かれている。17世紀代の肥前製品か。

《Ⅱ区の遺構》

SK11（第19図/図版11）

調査区南側西端に位置し、長軸0.8m・短軸残存長0.6m・深さ0.2mを測る。平面プランは円形を呈し、中央に土師質の大甕底部を残す。上面は後世の造成により大幅に削平されている。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とする。近世末～近代の便槽。

出土遺物（第19図/図版16）

底径35cmの大型の土師質甕。全体に摩滅が激しいため、内外面の調整は不明。内面には白色のこびりつきが多量に見られる。

SK12（第19図）

調査区中央東寄りに位置し、長軸0.65m・短軸0.65m・深さ0.2mを測る。平面プランは円形を呈し、SK14を切る。出土遺物は皆無である。

SK13（第19図/図版11）

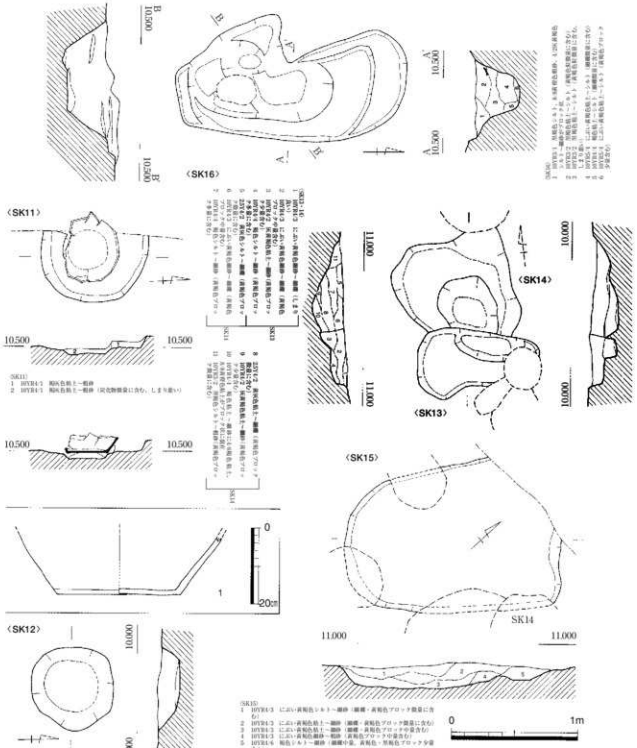
調査区中央東寄りに位置し、長軸0.9m・短軸0.45m・深さ0.2mを測る。平面プランは不整楕円形を呈し、SK14を切る。埋土は黄褐色土を主体とし、人為的に埋め戻されたと考えられる。

極微量の土師器片が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SK14（第19図/図版11）

調査区中央東寄りに位置し、SK12・13に切られる。長軸1.0m・短軸残存長0.7m・深さ0.3mを測り、平面プランは不整円形を呈する。遺構中央部にかけて全体が傾斜する、擂鉢状の構造を持つ。埋土は黄灰色土を主体とし、人為的に埋め戻されたと考えられる。

極微量の土器片が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。



第19図　11～16号土坑（S=1/30）及び出土遺物（S=1/5）

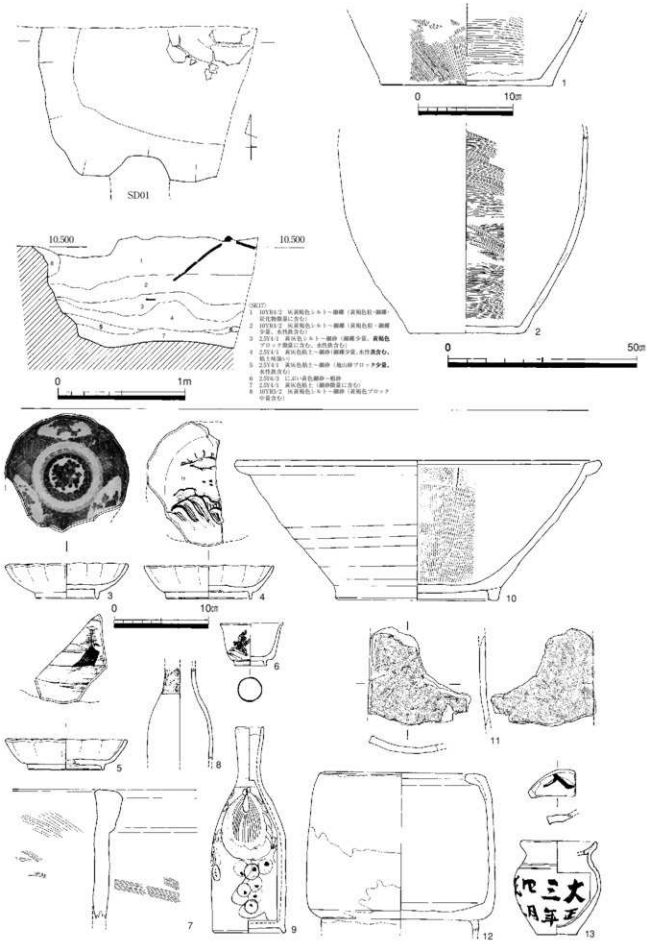
SK15（第19図/図版11）

調査区中央に位置し、SK14に切られる。長軸1.8m・短軸1.2m・深さ0.2mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。埋土は黄褐色土を主体とし、人為的に埋め戻されたと考えられる。

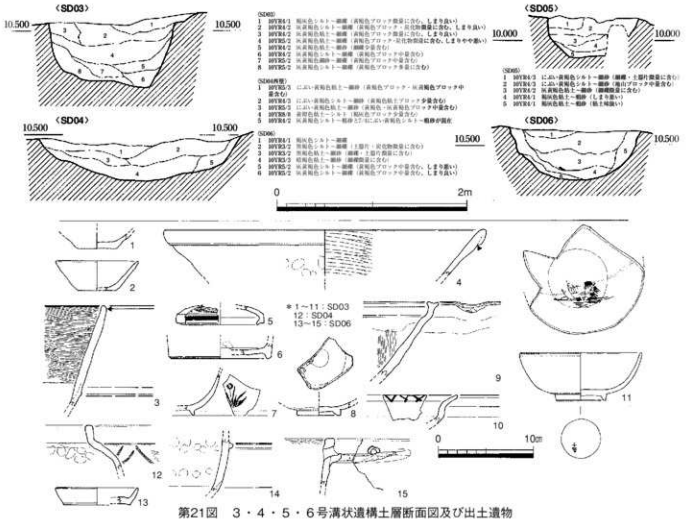
遺物の出土は皆無であった。

SK17（第20図/図版11）

調査区北端に位置し、SD01を切る。長軸残存長1.9m・短軸残存長1.3m・深さ0.8mを測る。平面プランは隅丸長方形と思われる。埋土は黄灰色土を主体とするが、遺構上面の埋土には現代の遺物が多数混入していたことから、後世の造成によって上面は攪乱されていると考えられる。



第20図　17号土坑（S=1/30）及び出土遺物（2はS=1/10，11はS=1/8）



第21図　3・4・5・6号溝状遺構土層断面図及び出土遺物

出土遺物（第20図／図版16・17）

多量の陶磁器がまとまりを持って出土している。1・2は土師質の大甕。内面ヨコハケ、外面タテハケを施す。いずれも便槽として使用されたもの。3は型押しの磁器皿。見込み部分に型紙摺りの菊花文を施し、輪状の釉ハギを行なっている。4・5は型押しの磁器皿。見込み部分の文様は粗略な山水文で、焼成時の窯道具痕跡が点々と残る。18世紀代の肥前製品。6は磁器の盃。外面に銅版転写の文様を施す。近代の製品。7は土師質の土管。内外面に薄くヨコハケを施した痕跡が残る。8は磁器の瓶。頸部から口縁部にかけて鉄釉を施す。幕末の肥前製品。9は磁器の瓶。頸部から口縁部にかけて鉄釉を施し、体部に細で葡萄文を描く。底部は焼きひずみによりひびが入っており、体部外面には付着物が多数見受けられる粗品。幕末の肥前製品。10は全面に施釉した陶器の擂鉢。貼付高台を持ち、内面に12条1組の擂目を施す。19世紀代の肥前製品。11は土師質の瓦状製品。内外面にナナメハケの痕跡が残る。12は陶器の火鉢。外面のみ灰黄褐色の釉薬を施していたようだが、まだらに剥げ落ちている。貼付高台を持つ。13は土師質の小壺。「大正三年」の年号と、かつて近隣にお住まいだったという個人名、「宝・来・亀」の文字が記載されている。内部に「入」の文字を記した土師片と植物の種子が入っていた。まじない的な要素を持つものか。

SD03（第15・21図／図版14）

調査区北寄りに位置し、東から西へ流れる。幅0.75m・深さ0.4mを測り、断面台形を呈する。SD01に切られる。平面図上はSD05と連続する一連の遺構に見受けられるが、遺構の底面レベルが著しく異なるため、別の遺構と判断した。埋土は灰黄褐色土を主体とし、水平堆積を基本とする。

出土遺物（第21図／図版17）

破片のみであるが、まとまった量の陶磁器類が出土している。1・2は土師器の皿。底部は回転糸切りで、回転ナデを施すが体部のひずみが目立つ。灯明皿かも。3は土師質の土鍋。内面ヨコハケ、外面ヨコナデを施し、外面の口縁部付近からこっそりと煤が付着している。4も土師質の土鍋であるが、内面のヨコハケの単位は粗い。口縁端部の屈曲部下から煤が付着している。5は磁器染付の蓋。外面のみ手描きで草花文を施す。6は磁器の鉢。残存部に文様は見られない。7は磁器染付の椀。17世紀代末の肥前製品。8は陶器の皿。緑青色の釉を施し、内面に輪状釉ハギ、肥前・内野山窯の製品、17世紀末の所産。9は陶器の

擂鉢。口縁部にのみ緑白色の釉を施す。内面に9条1組のまばらな擂目を施す。17世紀前半の肥前製品。10は陶器の皿。灰釉を施した後、口縁部のみに鉄釉で格子文を描く。17世紀代の肥前製品。11は陶器の椀。胎土は精良で良質な造りの京風肥前陶器。内面に細で山水文、高台内部に窯元名称「十吉」のスタンプを押す。17世紀後半の所産。

SD04（第15・21図／図版14）

調査区南寄りに位置し、東から西へ流れる。SD01に切られるが、それ以上東へは延長しない。SD01と交差する溝である可能性も考えたが、土層断面の状況から別々の遺構であると判断した。SD04を放棄した後、比較的近い時期にSD01を構築したと思われる。幅1.2m・深さ0.3mを測り、断面はU字型を呈する。埋土は褐色土を主体とし、人為的に埋め戻した様相を呈する。

出土遺物（第21図）

極微量の土器片が出土している。12は瓦質の羽釜。内面は粗い指オサエおよび指ナデで調整され、外面に櫛状工具で線文を施す。焼成は若干悪いが全体に灰色を呈する。

SD05（第15・21図／図版14）

調査区北寄り西端に位置し、東から西へ流れる。SD01に切られる。SD03とは別遺構であり、こちらが後出する。幅0.45m・深さ0.35mを測り、断面はU字型を呈する。埋土は黄褐色土を主体とし、人為的に埋め戻した様相を示す。

極微量の土器片が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SD06（第15・21図／図版14）

調査区北寄りに位置し、東から西へ流れる。SD01に切られるが、それより西へは延長しない。北岸に小規模なテラスを持つ。幅0.65m・深さ0.3mを測り、断面はU字型を呈する。埋土は褐色土を主体とし、人為的に埋め戻した様相を呈する。

出土遺物（第21図／図版17）

少量の土器片が出土している。13は土師器の皿。底面は回転糸切り、体部は回転ナデで調整しているがひずみが目立つ。灯明皿か。14は瓦質の羽釜。内部はネデ消しているものの指オサエ調整が多数残存する粗い造り。羽の下部にこっそりと煤が付着している。焼成は比較的良好。15は土師質の鍋。口縁部下に穿孔し、破損しているが羽がつく。外面は口縁部から下にうっすらとではあるが煤が付着している。

《Ⅲ区の遺構》

SK27（第23図／図版12）

調査区南寄り中央に位置し、長軸1.4m・短軸1.2m・深さ0.4mを測る。平面プランは円形を呈し、擂鉢状の構造を持つ。埋土は黄褐色土を主体とし、人為的に埋め戻した様相を示す。

極微量の陶磁器類が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SK28（第23図／図版12）

調査区南寄り東端に位置し、長軸1.3m・短軸残存長1.0m・深さ0.5mを測る。SD12を切る。平面プランは隅丸方形を呈すると思われる。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。

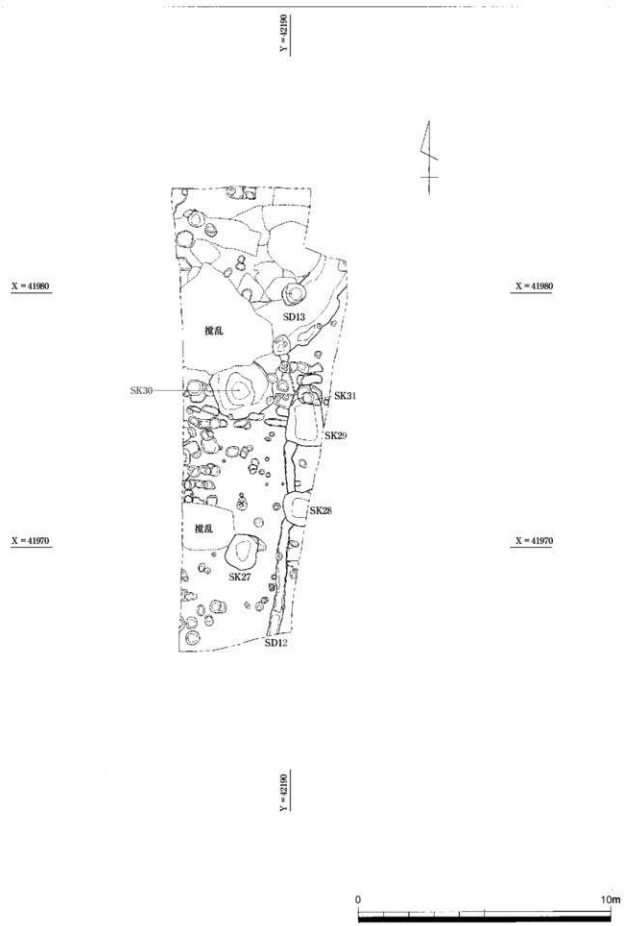
陶磁器類が少量出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

SK29（第23図／図版12）

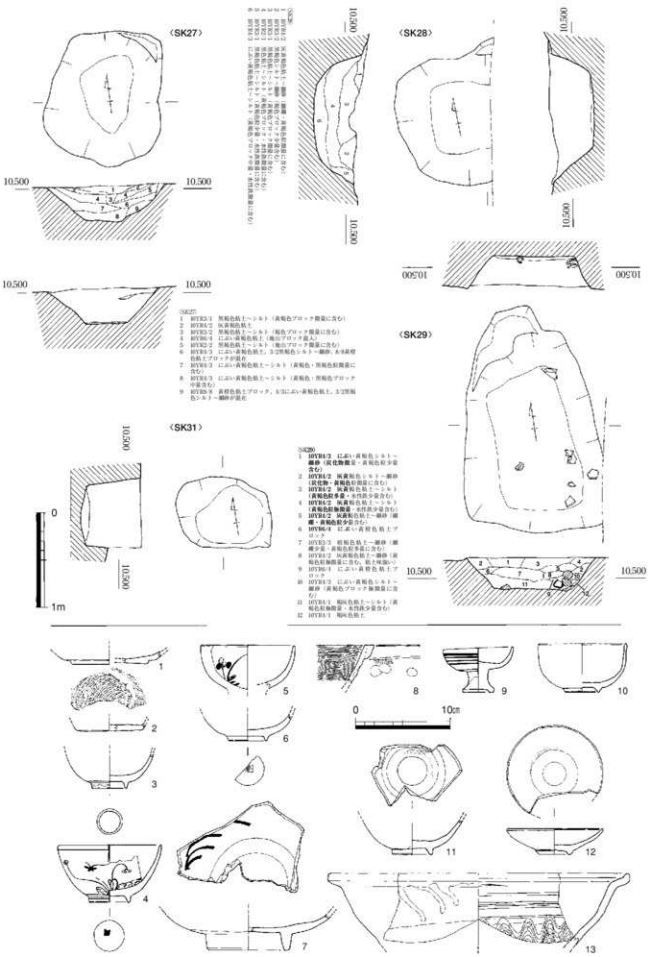
調査区中央東端に位置し、SK31を切る。長軸2.3m・短軸1.4m・深さ0.4mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。北側にテラスを持つ。埋土は灰黄褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しを行なった様相を示す。

出土遺物（第23図／図版17・18）

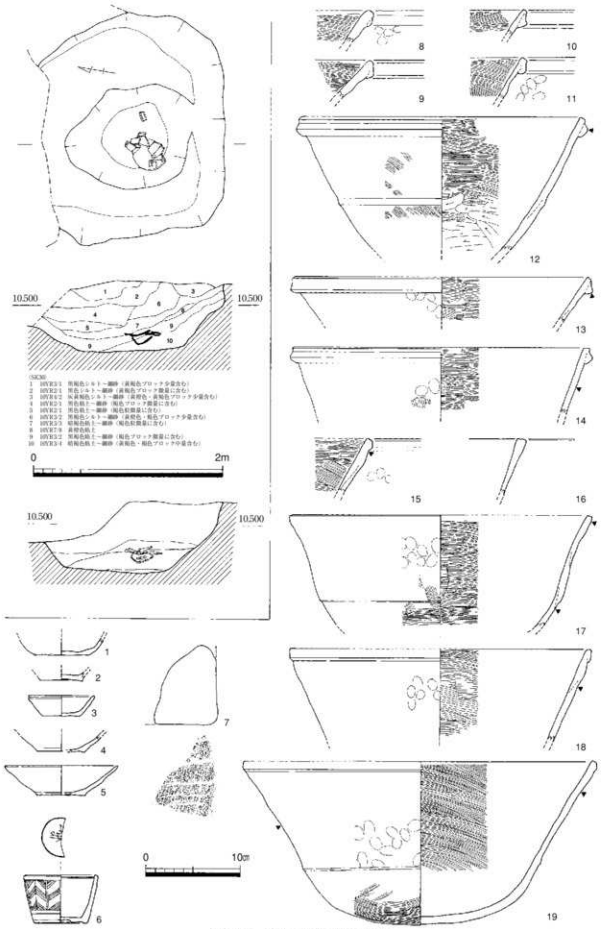
遺構床面を中心にまとまった量の陶磁器が出土している。1・2は土師器の皿。底部は回転糸切り、体部は回転ナデ調整を施す。3・4は磁器染付の椀。3は残存部には内外面とも文様は見られない。4は焼成が悪く、磁器特有の艶感に欠ける粗悪品。体部に草花文。18世紀前半の肥前製品。5・6は磁器染付の椀。外面の草花文を施す。高台内部に「朝」の文字が記されている、久留米藩領朝妻窯の製品。7は陶器の皿。内面に輪状の釉ハギを施し、鉄釉で線文を描く。18世紀前半の肥前・唐津の製品。8は土師質の土鍋。内面ヨコハケ、外面ヨコナデを施す。外面全体にこっそりと煤が付着している。9は磁器染付の仏飯具。18世紀後半の肥前製品。床面直上から出土しているため、この時期が遺構の埋没開始時期か。10は天目調の陶器の椀。見込み部分に窯道具痕と思われる長方形の痕跡が残る。18世紀後半の福岡の製品。11・12は磁器の皿。内面に輪状釉ハギを施しており、それに沿って若干の砂痕跡が見られる。18世紀後半の肥前製品か。13は陶器の皿。肥前産の二彩手で、見込みの一部に象嵌で文様を施す。18世紀初頭の所産。なお、図示はしていないがこの他に粘土塊が複数出土している。



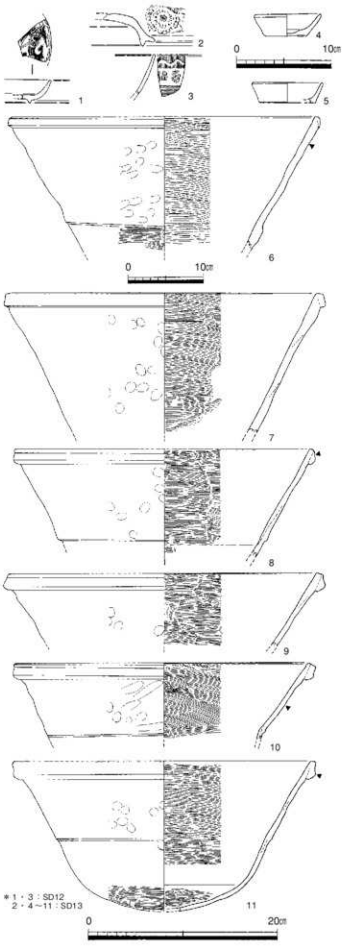
第22図　福童東内畑遺跡　Ⅲ区遺構配置図（1/150）



第23図　27・28・29・31号土坑及び29号土坑出土遺物



第24図　30号土坑及び出土遺物



第25図　12・13号溝状遺構出土遺物

SK30（第24図／図版12）

調査区のほぼ中央に位置する。長軸2.4m・短軸残存長2.0m・深さ0.8mを測り、平面プランは円形、擂鉢状の構造を呈する。埋土は黒色・暗褐色土を主体とし、人為的に埋め戻された様相を示す。完掘はしたが、遺構中央部から激しい湧水があった。

出土遺物（第24図／図版18・19）

土師質のものを中心に、遺構底面付近からまとまった量の遺物が出土している。1・2・3は土師質の皿。底面は回転糸切り、体部は回転ナデ調整を施すがひずみが目立つ。灯明皿か。4・5は同じ造りの土師質の皿。6は磁器染付の猪口。高台部分は蛇の目削出、外面に矢羽文を施す。19世紀初頭の肥前製品。7は花崗岩製の茶引臼。全体の六分の一程度が残る。8～11は土師質土鍋の口縁部片。いずれも口縁端部に断面三角形の突帯を貼り付けたもので、内面は丁寧なヨコハケ、外面は指オサエ痕跡とそれをナデ消すためのヨコナデを施す。12～14は土師質の土鍋で口縁部に突帯を持つもののうち、比較的残りの良いもの。内面上部は丁寧なヨコハケ、下部はヨコケズリを施し、外面は指オサエ痕を消すためにハケを用いるものもある。体部は粘土帯の積み重ね接合によって形成されており、中央付近で接合に由来する稜ができている。12・13は突帯部分から、14は体部から下に厚く煤が付着している。15～19は土師質の土鍋のうち、口縁部に突帯を持たないもの。内面が丁寧なヨコハケ、外面が指オサエの残るナデ調整もしくはハケ調整である点、体部中央に形成時の手法に由来する稜が見られる点は共通している。15・17は口縁部付近から、18・19は体部上方から厚い煤の付着が確認できた。17・19については外面底部に不定方向ではあるが丁寧なハケ調整を施している。19は完形に復元できたものであるが、内面底部には製作時に施したナナメハケと、その上から使用による摩滅および有機物の焦げ付きが観察された。これにより、この形状の土鍋は日常的に煮炊きに使用する調理器具と断定できよう。

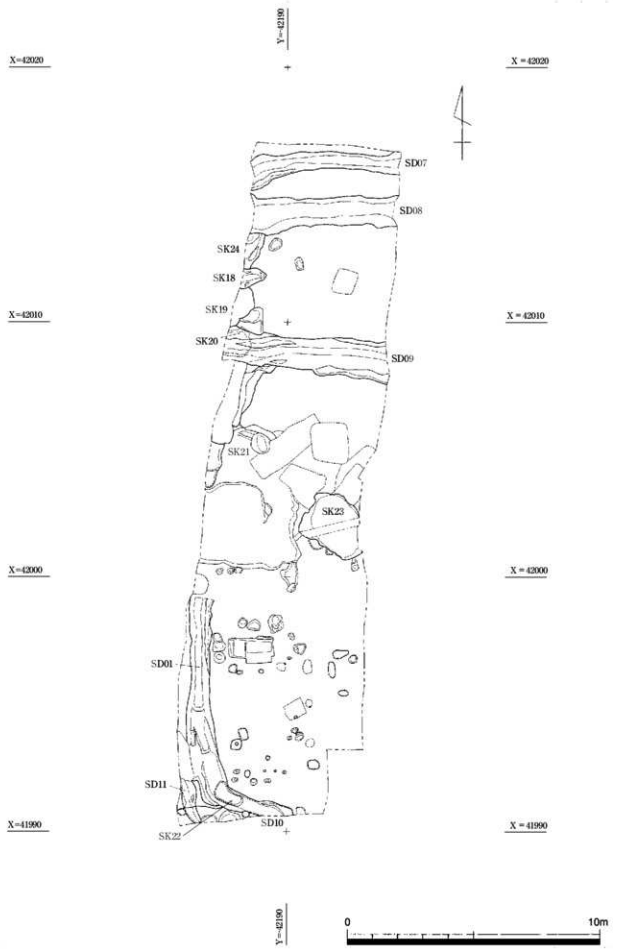
SK31（第23図）

調査区中央東寄りに位置し、長軸0.9m・短軸0.7m・深さ0.65mを測る。SK29に切られる。平面プランは不整楕円形を呈し、埋土は遺構検出面に類似する黄褐色粘質土を主体とする。

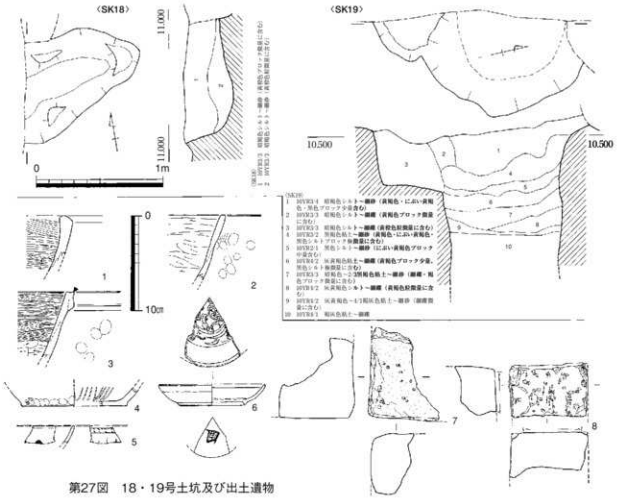
遺物の出土は皆無であった。

SD12（第22図）

調査区東寄りを南から北へ流れる。幅0.25m・深さ0.2mを測り、断面はU字型を呈する。SK28・29に切られるが、



第26図　福童東内畑遺跡　Ⅳ区遺構配置図（S=1/150）



第27図　18・19号土坑及び出土遺物

SK29より北へは延長しない。また南側については、Ⅰ・Ⅱ区のSD01とも埋土の状況・遺構底面のレベル等から、連続しない別遺構であると判断した。

出土遺物（第25図）

微量の陶磁器片が出土している。1は磁器皿。型紙摺りで鳳凰状の文様が施されている。3は磁器椀。同じく型紙摺りで寿・福字文が施されている。

SD13（第22図／図版15）

調査区北寄りを南西から北東へ流れる。南北とも調査区外へ延長するが、Ⅳ区ではこれと連続する溝状遺構は検出されていない。残存幅0.9m・深さ1.0mを測り、断面はU字型を呈する。南岸に小規模なテラスを持つ。埋土は褐灰色土を主体とし、人為的な埋め戻しを行なった様相を示している。

出土遺物（第25図／図版19）

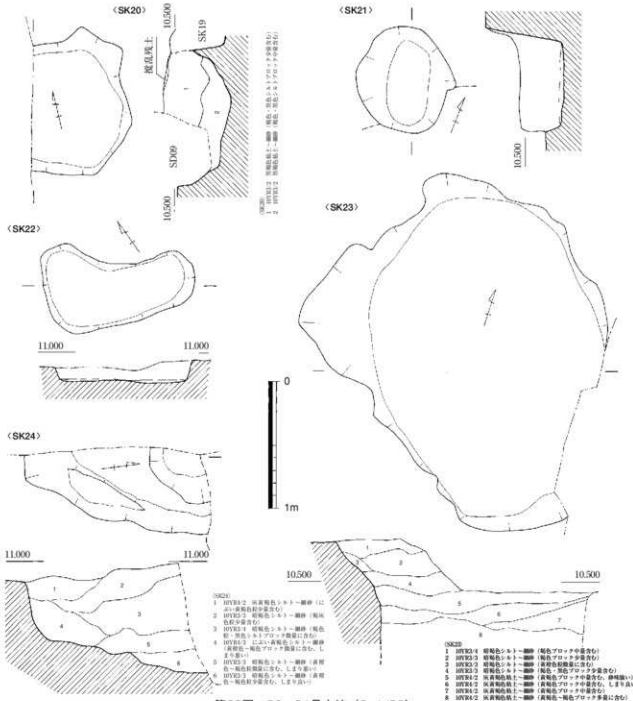
比較的まとまった量の遺物が出土している。2は色絵貼付牡丹文の磁器の蓋。4・5は土師器の皿。底面は回転糸切り、体部はひずみが目立つ。灯明皿か。6・7は土師質の土鍋で、口縁部に突帯を持たないもの。内面は丁寧なヨコハケ、外面は粗い指ナデ・指オサエの後粗雑なナデ調整を施す。体部中央には稜があり、それより下方の外面は不定方向のハケで調整されている。6は体部上方から煤の付着が見られる。8～11は土師質の土鍋のうち、口縁部に断面三角形の突帯を持つもの。内外面の調整は6・7と同様である。但し、突帯については8・9・10のように明瞭に貼り付けているものと、11のように口縁端部を折り返して撫で付けた可能性が高いものがある。8・11は突帯部分から、10は体部上方から下にかけてこってりと煤が付着している。

《Ⅳ区の遺構》

SK18（第27図／図版11）

調査区北寄り西端に位置し、SK19・SK24を切る。長軸残存長0.9m・幅0.7m・深さ0.4mを測る。平面プランは不整楕円形を呈すると思われる。埋土は暗褐色土で人為的に埋め戻した様相を示す。

極微量の土師器片が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。



第28図　20～24号土坑（S=1/30）

SK19（第27図／図版11）

調査区北寄り西端に位置し、SK18に切られる。長軸残存長1.5m・短軸残存長0.8mを測る。平面プランは円形を呈し、南側に規模は小さいが深さのあるテラスを持つ。5層付近まで掘り進めると激しく水が湧き出したのと、10層に到達した時点で現地表面から2.5mの深さまで掘削していたことから、完掘は断念した。遺構に伴う石積み・木枠等は確認されていないため、素掘りの井戸と考えられる。南側のテラスは足場状の施設か。

出土遺物（第27図／図版19・20）

破片のみだが土器片・土製品が少量出土している。1は瓦質の鉢。焼成は良好で外面は丁寧な工具ハケ、内面は丁寧なヨコハケを施す。2は瓦質の鍋類か。内面はヨコケズリ、外面は指オサエの後部分的にタテハケ調整を施している。3は土師質の土鍋。内面上部は丁寧なヨコハケ、下部はヨコケズリを、外面は粗い指オサエの後雑なナデ消しを施す。外面の口縁端部から下はこってりと煤が付着している。4は土師質の擂鉢。本来は瓦質である製品の焼成不良か。外面はタテハケ、内面はヨコナデの後4条1組の擂目を施す。5は磁器染付の皿。内外面に絵付を施す。6は磁器染付の皿。内面に中国由来の文様を施し、窯道具の痕跡が点々と残る。高台内部には文字を記す。17世紀末の肥前製品。7は多孔質安山岩製の石造物片。方形でしっかりした稜を持つ。

用途は不明。8は砂岩製の砥石。本来石造物の一部を構成していたものが、砥石に転用され、後置石へと再転用されたと考えられる。方形で稜はしっかりしているが、一面のみを砥面としており、同じ面に砥面を破損して打痕が刻まれている。

SK20（第28図／図版11）

調査区北寄り西端に位置し、SK19・SD09に切られる。長軸1.1m・短軸残存長0.8m・深さ0.5mを測る。平面プランは不整円形を呈すると考えれらる。埋土は黒褐色土で、人為的に埋め戻された様相を示す。

出土遺物は皆無であった。

SK21（第28図／図版12）

調査区中央西寄りに位置し、長軸0.8m・短軸0.75m・深さ0.6mを測る。平面プランは円形を呈する。

遺物は全く出土していない。

SK22（第28図）

調査区南端に位置し、SD10を切る。長軸1.2m・短軸0.6m・深さ0.15mを測る。平面プランは不整楕円形を呈する。

遺物の出土は確認できなかった。

SK23（第28図／図版12）

調査区中央東寄りに位置する。長軸3.0m・短軸2.1mを測り、平面プランは楕円形を呈する。掘削開始段階から湧水が激しく、完掘は断念した。埋土は上面が暗褐色・中層が灰黄褐色土を主体とし、人為的に埋め戻された様相を示す。遺構に伴う石積み・木枠等は確認されていないため、素掘りの井戸と考えられる。

極微量の陶磁器が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SK24（第28図／図版11）

調査区北寄りの西端に位置し、SK19を切り、SD08に切られる。長軸残存長1.6m・短軸残存長0.6m・深さ0.7mを測る。平面プランは不整楕円形を呈すると思われる。東側に小規模なテラスを持つ。埋土は暗褐色土を主体とし、人為的に埋め戻された様相を示す。

微量の土器片が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

SD07（第26・29図／図版15）

調査区北端を東から西へ流れる。幅0.9m・深さ0.6mを測り、断面はU字型を呈する。埋土は黒褐色土を主体とし、人為的に埋め戻された様相を示す。

極微量の土器片が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

SD08（第26・29図／図版15）

調査区北端を西から東へ流れる。SK24を切る。幅1.6m・深さ0.9mを測り、断面はU字型を呈する。埋土は灰黄褐色土を主体とし、人為的に埋め戻された様相を示す。

出土遺物（第29図／図版20）

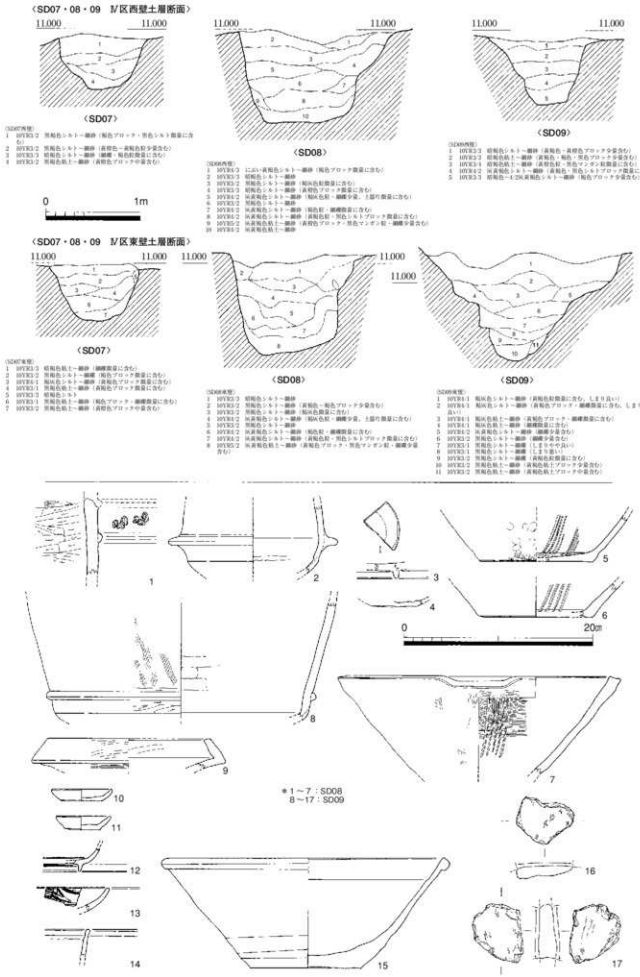
破片のみであるが少量の土器類が出土している。1は瓦質の火鉢。内面は板状工具でヨコケズリを、外面は2条の突帯の間に花状のスタンプ文様を施す。2は瓦質の羽釜。内外面とも丁寧なヨコナデ調整を施す。羽の下部には厚く煤が付着している。3は陶器の皿。内面に輪状の釉ハギを施す。18世紀代の肥前製品。4は土師器の皿。底部は回転糸切り離し。5～7は瓦質の擂鉢。5は外面指オサエの後ナデ消し調整、内面は4条1組の擂目を施す。焼成が悪く、全体に黄橙色を呈する。6は内外面とも摩滅が激しく調整は不明である。4条1組の擂目を施す。焼成は悪く、黄橙色部分が各所に残る。7は口縁部に片口状の形態をとる。外面はハケの後ナデ消し、内面はヨコハケの後5条1組の擂目を刻む。8は土師質の土鍋。内面は板状工具によるヨコナデ、外面は上部にタテハケ、下部にヨコケズリを施す。体部下方に明瞭な貼付の突帯を持つ。

SD09（第26・29図／図版15）

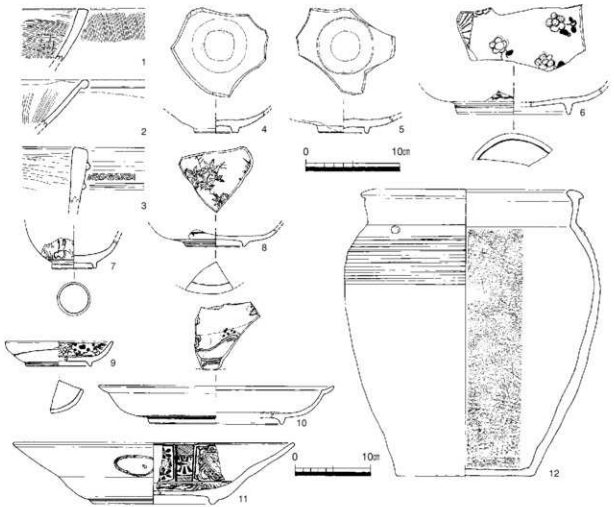
調査区北側を東から西へ流れる。SK20を切る。南北両岸に浅いテラスを持つ。幅2.0m・深さ1.2mを測り、断面はV字型を呈する。埋土は上面が褐灰色、下面は黒褐色土を主体とし、人為的に埋め戻された様相を示す。

出土遺物（第29図／図版20）

埋土内から少量だが土器片が出土している。9は弥生時代末の壺。混入遺物であるが参考のため掲載した。10・11は土師器の皿。底部は回転糸切り、体部は回転ナデを施すがひずみが目立つ。灯明皿か。12は磁器染付の椀。残存部に目立った文様は見られない。13は磁器染付の皿。見込み部分に草花文が見受けられるが釉薬の発色は極めて悪い。14は陶器の鉢。口縁部のみ



第29図　7～11号溝状遺構土層断面図及び出土遺物



第30図　Ⅰ・Ⅱ区１号溝状遺構出土遺物（11・12のみS=1/5）

に黄褐色釉を施す。15は陶器の擂鉢。焼き締めたタイプのもので、底部は回転糸切り、内面に10条１組の擂目を施す。擂目は使用により激しく摩滅している。17世紀前半の肥前製品。16・17は流紋岩製の砥石。

SD10（第26図／図版15）

調査区南端から出て湾曲した後北へ流れる。幅0.4m・深さ0.8mを測り、断面はU字型を呈する。SD01に切られるが、切り合い部分を明瞭に検出することができなかった。湾曲部分が内側へえぐられており、遺構底面に浅く細かな溝状痕跡があることから、流水を伴う溝であったと考えられる。

遺物は極微量の土師器片が確認されているが、いずれも細片のため図示しなかった。

SD11（第26図／図版15）

調査区南西隅に位置し、南から北へ流れる。幅0.2m・深さ0.6mを測り、断面はU字型を呈する。北側を現代の攪乱に切られているが、それより北へは延長しない。

遺物の出土は皆無であった。

〈複数の調査区にまたがる遺構〉

Ⅰ区SD01（第15図／図版10）

調査区西側を南から北へ流れる。SK03を切り、SD02に切られる。中央部で一旦途切れるが、北側で極浅く西岸のみだが続きを検出している。幅0.7m、深さ0.3mを測り、断面はU字形を呈する。埋土は灰黄褐色砂質土が主体となる。遺構は全体に浅く、上部は後世の造成により大幅に削平されている。掘り込み面は黄褐色の砂質土で、南側を中心に掘削開始段階から湧水が目立った。遺構はこの湧水によって調査中徐々に侵食される状況にあったため、調査完了後に撮影した調査区全景写真と、調査途中に作成した遺構配置図とは若干の齟齬があることをここに断っておく。

Ⅰ区SD01出土遺物（第30図／図版20・21）

Ⅰ区では調査区南端部を中心に、埋土の上層から中・下層にかけて全体的に遺物が含まれていた。器種構成は瓦質土器と陶

磁器を中心とし、土師器はほとんど確認されていない。

1は瓦質の擂鉢で、外面は丁寧なタテハケ、内面はヨコハケの後4条1組の擂目を施す。焼成は良好で全面黒灰色を呈する。2は陶器の擂鉢。玉緑状の整えられた口縁部にのみ鉄釉を施し、内面には9条1組のまばらな擂目を刻んでいる。17世紀末の肥前製品。3は瓦質の火鉢。内面に粗雑なヨコハケ、外面には2重の突帯の間に8の字のスタンプ文様を施す。4・5は陶器の皿。いずれも内面に輪状の釉ハギを施しており、この部分に沿って若干ではあるが砂粒が焼き付いている。釉薬は漬け掛けだが底部の処理は粗く、体部下方から高台にかけて釉ダレが残る。17世紀末の肥前製品。6は磁器染付の中皿。内外面に粗略な梅花文を施す。17世紀代の肥前製品。7は磁器染付の椀。外面のみに草木文を施している。8は磁器染付の皿。内面に紅葉文を施す。図示はしていないが、Ⅱ区SD01からも同様の文様を施した磁器片が出土している。9は磁器染付の小皿。見込み周辺部のみに山水状文を施す。10は陶質磁器の大皿。見込み周辺部に波状文を施す。

Ⅰ区SD01の出土遺物については、若干の時期差はあるものの、概ね17世紀代後半で収まる。但し出土地点はほとんどが溝状遺構の埋土内上・中層部分で、遺構構築時期の特定には参考にできない。

Ⅱ区SD01（第15図／図版13）

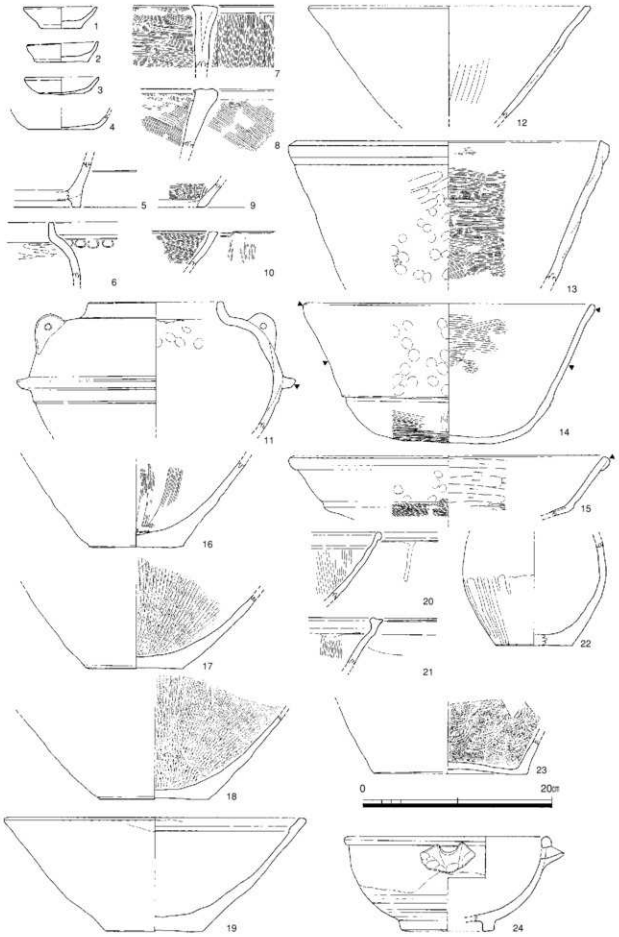
調査区西端に位置し、SD03・04・05・06を切り、SK11・17に切られる。南から北へ流れる。幅1.2m・深さ0.8mを測り、断面はV字型を呈する。遺構の残存状況は良好であった。埋土は灰黄褐色土を主体とし、下層にゆくほど粒子の粗さが目立つ。遺構底面には浅い溝状の痕跡が残っており、機能していた際は流水を伴っていたと考えられる。掘削時に微量の湧水があり、降雨の後はポンプアップを行ってもしばらく水が引かない状況が頻繁に見られた。Ⅱ区の遺構検出面は比較的しっかりとした黄褐色ローム部分であったため、遺構の侵食はほとんどない。

Ⅱ区SD01出土遺物（第30・31・32図／図版21・22）

Ⅱ区の北半部を中心に多量の陶磁器が出土した。特にSD03・05との交差部分の上層と、それより北部分の上・中層からはまとまった量が出土しており、ともに残存状況も良好である。これらはSD01の最終埋没段階のものと考えられる。器種構成は土師器から瓦質土器・陶磁器まで幅広く、調理具・貯蔵具・供膳具の全てが混在している状況である。

30－11は磁器の大皿。外面に円形文が1点、うっすらと残っている。中国青花の影響を受けた芙蓉手皿。焼成は非常に悪く、磁器特有の艶感は全くない。この遺物は2点の破片が合わさった状態で出土しており、取り上げ後に破片同士を漆で継いでいることが明らかになった。17世紀中頃の肥前・有田産。12は陶器の甕。外面全面に格子叩きを施した後板状工具でナデ調整を行い、頸部に回転ケズリで幅広の沈線を刻みこむ。ボタン文と呼ばれる親指大の粘土貼付が4箇所確認できる。内面には格子文の当て具痕跡。口縁部の形状と叩き調整の様相から17世紀半ばの所産と思われる。

31－1～4は土師器の皿。底部は回転糸切り、体部は回転ナデ調整を施すがひずみが目立つ。1・2は外面が煤けており、灯明皿として使用していたのだろう。5は瓦質の火鉢。外面に1条の沈線が廻る。高台は貼付である。6は瓦質の羽釜。内面は丁寧なヨコケズリとナデ、外面は板状工具でナデ調整を施した後、U字型のスタンプ文様を刻む。7・8は瓦質の土製品。内外面とも丁寧なハケ調整を施す。用途は不明である。9は瓦質の擂鉢。内面にヨコハケ調整を施した後、4条1組の擂目を刻む。10は瓦質の片口鉢だが擂鉢の可能性もある。外面はタテハケの後ナデ消し、内面は丁寧なヨコハケを施す。焼成は悪く、黄褐色部分が各所に残る。11は瓦質の羽釜。内面は粗い指オサエと指ナデの痕跡が残る粗製品。外面は逆に板状工具による丁寧なナデ調整を施しており、羽下部には厚く煤が付着している。12は土師質の擂鉢。全体に二次的な摩滅が激しいが、内面に薄く6条1組の擂目が確認できる。13・14・15は土師質の土鍋。13は口縁部は体部から連続し、突帯をもたないタイプ。外面には指オサエ・指ナデ痕跡が多数残るが、内面は丁寧なヨコハケを施す。14は体部下方に稜を持ち、そこから底面にかけて不定方向のハケを施す。口縁部から体部中央にかけて厚く煤が付着している。15は口縁部に突帯を持つタイプ。通常の土鍋と比べて口の開きが大きく、器高も浅い。内面に板状工具による丁寧なヨコナデを施し、外面は中央の稜から下にヨコハケを施す。ヨコハケ部分には厚く煤が付着している。16～19は陶器の擂鉢。16・18は無釉の焼締タイプ、17は全面施釉、19は口縁部のみに鉄釉を施す。いずれも底部は回転糸切りで、内面に9条1組の擂目を施す。16は使用により擂目が激しく摩滅しているが、17・18はどの部分にも全く使用痕跡がない。19は内面中央部のみ使用による摩滅が観察できる。いずれも肥前の製品だが17は18世紀初頭、18・19は17世紀末の所産。20・21は同じく陶器の擂鉢だが、口縁部のみに施釉し、胎土が黄褐色のもの。20は鉄釉を施し、内面に12条1組の粗い擂目を刻む。21は緑灰釉を施し、内面に8条1組の擂目を刻む。いずれも17世紀後半の肥前製品。22は陶器の小壺。底部は回転糸切りの痕跡を残し、体部は全体にロクロ引き上げの凹凸が目立つ。外面にのみ全面に鉄釉をかけ、その上からさらに黒色釉を文様的に掛け流している。肥前製品。23は陶器の甕。内外面とも灰色の釉がまだらに付着している。焼成時の焼き付きも



第31図　Ⅱ区1号溝状遺構出土遺物（1）

比較的多く、粗製品と思われる。内面に同心円の当て具痕が多数残る。全体の形状は30－2のタイプか。24は片口付の鉢。ロクロ引き上げで口縁部が玉縁状、外面下部に回転ケズリを施し、沈線状の効果をもたらしている。高台は削出、片口部分は貼付だが非常に雑に仕上げてある。17世紀後半の肥前製品。

陶器類は全て肥前産で、その種類も多様である。造りは良好なものと粗悪なものが混在している。土師質・瓦質の製品については、近世には在郷の村で生産したと考える向きもあるが、形状・大きさには明確な規格が存在しているようである。

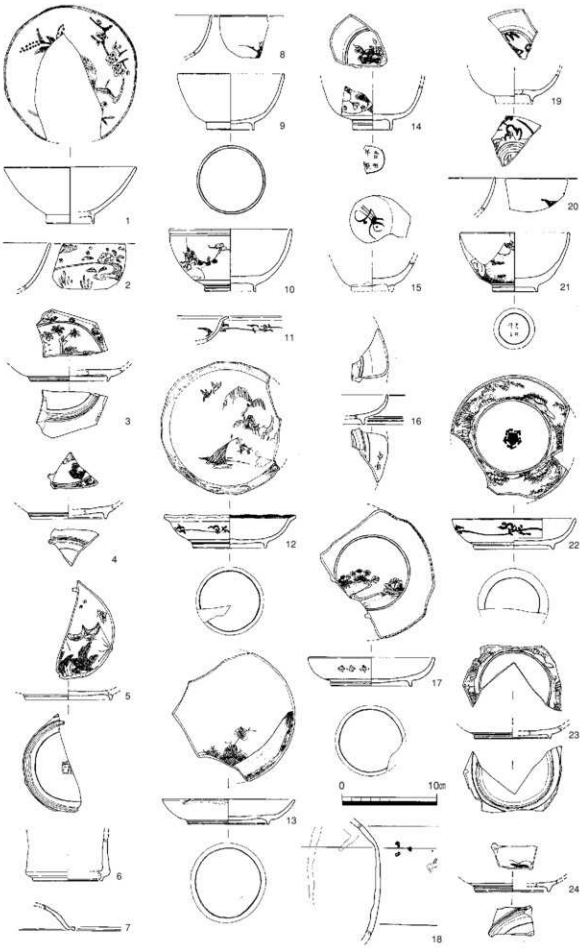
32－1は色絵のうがい椀。口縁端部に口紅状に釉を施し、内面にのみ色絵で梅花文を描く。柿右衛門様式初源期の製品か。17世紀後半の肥前・有田産。2・8は色絵の椀。口縁端部に口紅状に釉を施し、外面にのみ色絵で流水文を描く。いずれも赤・群青・緑の三色を用いているが、絵の具ののりは極めて悪い。17世紀末の肥前・有田の製品。3・4は磁器染付の皿。見込み周辺部の草花文が共通することから、同一個体片あるいは同種の皿の破片と思われる。見込み部分には二重線で囲った上で花卉文を施している。釉の発色も良く、高台部分の釉ハギも丁寧な良品である。17世紀半ばの肥前製品。5は磁器染付の皿。残存部分の絵付けのウサギや花に共通点が見られることから、SD02で出土した磁器皿と同種の製品と思われる。高台内部には「福」の文字が記されている。6は白磁の瓶類。ロクロ引き上げの痕跡が明瞭に残るが、釉掛けや高台部分の処理は丁寧な良品。7は磁器の蓋。瓶類に付属するものか。黄褐色の釉薬を施す。9は白磁の椀。口縁部に口紅状の鉄釉。10は染付の椀。見込み部分には二重線のみを施し、体部外面に草花文を描く。17世紀末の肥前製品の典型的なスタイルをとっている。11・12は外面の草花文の共通性と、口縁部内面の薄瑠璃釉状の部分が同じであることから、同種の磁器染付皿の別破片と判断した。高台部分とその内部には一重線を施している。内面は口縁端部を屈曲された後、花弁状に変形させ、その部分に薄瑠璃釉状の釉を施す。見込み部分には釣屋山水文を描いている。見込み部分に焼成時に付着したと思われる薄い焼き付きがあるが、比較的良好な品といえる。17世紀代後半の肥前製品。13は磁器染付の皿。外面には文様はなく、高台内部にのみ一重線を施す。見込み部分には余白の目立つ山水松葉文。14は磁器染付の椀、見込み部分に二重線を施し、その内部のみに草花文を描く。外面は体部下方と高台部分にそれぞれ線文を施し、蔦文を描く。口縁部にも二重線を描いていたと思われる。高台内部には「青明年製」の文字が記されている。中国製品の影響を受けた、17世紀末の肥前製品。15は磁器椀だが、外面にのみ全面鉄釉を施す。見込み部分には梵字を模した文様を描く。17世紀代の肥前製品か。16・17は内外面の文様の共通性と製品の形状の特性から、同種の製品の破片であると判断した。口縁部はロクロ引き上げの後、端部を部分的に屈曲させて四隅がくぼんだ特殊な形態をとる。口縁端部に口紅状に鉄釉を施し、外面には3点1セットの渦巻文を描き、高台部分とその内部に線文を引く。内面は見込み部分に二重線を引き、その内部に流水菊花文を施す。焼成は極めて良好で、文様の描き方も丁寧であることから、通常製品とは異なるレベルの良品と思われる。17世紀後半の肥前・有田の製品。18は磁器染付の壺類。ロクロ引き上げの痕跡が内外面とも明瞭に残る。残存部分の外面には点状の文様のみが確認できる。内側に白釉の垂れた痕跡が見られる。19は磁器染付の椀。内面は見込み部分に二重線を施し、その内部のみに文様を描く。外面は高台部分およびその内部に線文を施し、体部に草木文を描いているが、おそらく口縁部付近にも二重線文を施していたものと思われる。高台内部には全文は不明だが「修」の文字を含む4文字が記されていたのであろう。20・21は外面の文様に共通性があることから、同種の製品の破片であると判断した。ともに磁器染付の椀で、体部外面にのみ草木文と蝶を描く。高台部分およびその内部に線文を施し、篆書体で「□□年製」の文字を記す。中国製品の影響を受けた、17世紀末の肥前製品。22・23は文様と形状・胎土から明らかに同種の製品であると認識できる。図示はしていないが、この他にもこの2点とは接合できない同じ種類の製品の小片が出土しており、少なくとも3点以上のこのタイプの製品が廃棄されたものと思われる。外面には草花文、高台部分およびその内部には線文を施す。内面は見込み中央部に五弁花文、周辺部には松竹山水文を施す。胎土は陶器に近い。24は磁器染付の皿。高台部分およびその内部に線文を施し、見込み部分におそらく蝶と思われる昆虫文を描く。

磁器については染付の量が圧倒的に多く、色絵製品は微量である。また比較的良品が多く、皿・椀とも大きさの面で規格性が見られる。

Ⅳ区SD01（第26図／図版14）

調査区南西隅から北へ流れる。幅1.1m・深さ0.9mを測り、断面はU字型を呈する。北端は現代井戸に切られるが、それより北へは延長しない。調査段階では、SD01はⅢ区では現況道路方向へ湾曲しており、Ⅲ・Ⅳ区間の調査区外箇所で東西方向の別の溝状遺構と接続する形で引き込まれ、その一部が再び北へ延長してⅣ区での検出にいたると想定していた。Ⅳ区南端にはSD01の南端の状況が反映されていないため、別の遺構である可能性もある。

遺物は極少量の土師器・陶磁器が出土しているが、いずれも図示におよばない製品であり、時期の特定もできなかった。



第32図　Ⅱ区1号溝状遺構出土遺物（2）

Ⅵ．調査成果のまとめ

今回ここに報告した３遺跡は、調査原因と着手時期の都合によってそれぞれ別の遺跡として名称をつけているが、関連する一連の遺跡と考えられる。そこで、調査成果については各遺跡の成果を概略した上で、これら全てを総括して行ないたい。

《福童町遺跡４》

弥生時代から近世にいたるまでの遺構が確認されるも、そのほとんどが溝状遺構であり、調査区全域にわたって極めて遺物の出土が少なく、しかも二次的な摩滅が激しい。近接する地域には縄文時代から近世にいたるまでの生活域が存在していたものと考えられるが、ここで検出された遺構そのものは日常的に生活の中で利用するものではなかったと考えられる。またⅡ区の遺構検出面の傾斜変化から、かつては現在の道路側に谷状の地形が存在していたと考えられる。おそらく弥生～近世にわたって西福童区の生活圏においての何らかの境界部分であったと考えられる。

《福童町遺跡６》

合計16条と多数の溝状遺構が検出されている。しかし、これらの多くは北に隣接する福童町遺跡4で検出された溝状遺構とは連続しない別の遺構である。福童町遺跡４で検出され、南へ延長する溝状遺構についても同様の傾向が見られる。これらの溝状遺構はともに調査対象区外において別方向への屈曲を見せるか、あるいは調査時に検出された新しい時期の遺構の掘削により削平されたと考えられる。福童町遺跡４・６ともに調査区内は複数の溝状遺構が位置を同じくして交錯した状況にあり、低位段丘から沖積地へと地形が変化して谷地形への変換点となる位置的な問題から何らかの区画施設という意味合いを込めて溝を構築したと想定される。

《福童東内畑遺跡》

近世の所産である遺構・遺物が集中しており、中世の遺構は極わずかに見られるのみである。溝状遺構は計13条と多数検出されているが、この遺構は福童町遺跡の各溝状遺構とは互いに関連しない。またこの遺跡では井戸状遺構・廃棄土坑等、生活に密着した遺構も散見できる。溝状遺構は上記の２遺跡とは異なって生活範囲の区画であり、この東側に近世集落が営まれたものと見られる。但し17世紀以前の遺構・遺物は混入品を除いて確認できないことから、この付近には近世以前は集落が形成されていなかったと考えられる。

以上の各遺跡の調査成果から、現在の市道･下町西福童16号線部分は、地形の変換を伴う集落域の西端であったと判断できる。近接する地域には縄文時代中期を嚆矢に人間活動が営まれていたが、集落の拠点は遺跡地からやや離れた箇所に存在したと思われる。それは弥生時代の大規模な甕棺墓地が確認されている北東の寺福童区であり、古墳時代初頭から後期にかけての竪穴住居跡を検出している南東の現在の西福童区の集落内であったと考えられる。しかしながら現行の道路部分まではその集落域を営む集団の生活圏であり、それを内外に示すための溝状遺構の構築であったと想定できよう。

奈良・平安時代にはこの地域も律令制の施行がなされ、新たな土地区画のラインが引かれたはずであるが、その痕跡は明瞭には残っていない。この問題については Ⅷ 章で後述する。

中世に入ると、農地としての活用が積極的になされたのか、用水路としての機能を有すると考えられる溝状遺構が確認できる。しかしあくまで遺跡地周辺の用途は生産域としてのそれであり、人びとが日々の生活を営む場所ではなかったと考えられる。

近世以降はようやく隣接した場所に集落を形成するようになる。ここで初めて集落域として活用されるようになったのは、既存集落が手狭になったための生活圏の拡張である可能性が高いだろう。遺跡地は標高が低く、湧水が激しい上、一旦洪水が起これば田畑も住宅も水にのまれる地域である。その状況は昭和まで継続しており、集落を営むのに適した土地とは言い難い。集落の拠点そのものは、現在も宅地となっている道路の東側に位置する台地上であったと考えられる。

今回報告した溝状遺構を「生活域の境界」として構築し、利用していた集団の拠点については、古墳時代においてはこれまで調査されてきた福童町遺跡１・３が該当すると思われる。但し、両遺跡においては弥生時代・中近世の集落の存在を示唆する成果はあげられておらず、これについては今後の資料の蓄積を待たなければならないだろう。

Ⅶ．調査成果の検討

本報告書が刊行されるまでに、福童区内においては８回の発掘調査が実施されている。それぞれの調査箇所は第33図のとおりであるが、このうち古代以前の遺跡と認められるものは福童町1と福童町３・４の一部のみであり、その他は中～近世の遺跡である。古代以前の遺跡は現在の西福童集落中心部にあり、中～近世の遺跡はその周辺部に分布している。

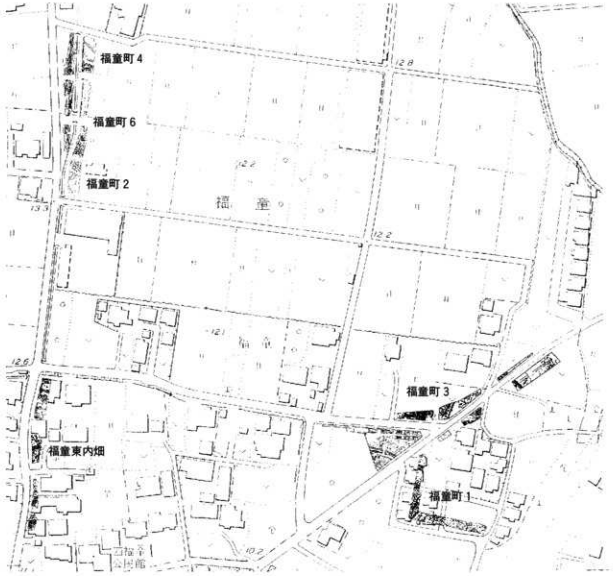
これまでの発掘調査事例では、小郡市域における集落は丘陵・段丘といった周囲よりやや高い、安定した土地に形成されることが多いことが明らかになっている。しかし現在の西福童集落は三角州もしくは谷底平野に位置しており、住宅密度がやや希薄になる西及び北は砂礫台地で若干高さのある安定した場所である。現在の調査成果からは、近世以前の集落域も現在の集落域と同様の分布を示すと想定でき、ここに市内の他地域とは異なる西福童区独自の集落形成の特徴がある。何故そのようなスタイルをとるのかは、今後これまで調査されてきた遺跡の物理的・時間的な広がりや密度・性格等がより広い範囲にわたって解明されれば明らかになるだろう。

ここでは調査において検出した遺構および出土した遺物に着目し、その具体的な性格づけと、未だ調査の手が及んでいない現在の集落域がどのような性格であると推測できるのかについて検討する。

（1）溝状遺構の機能について

1）はじめに

今回報告する福童区内の３件の発掘調査においては、複数の時代の所産である延べ54条の溝が確認されている。いずれの時



第33図　遺跡地周辺の状況

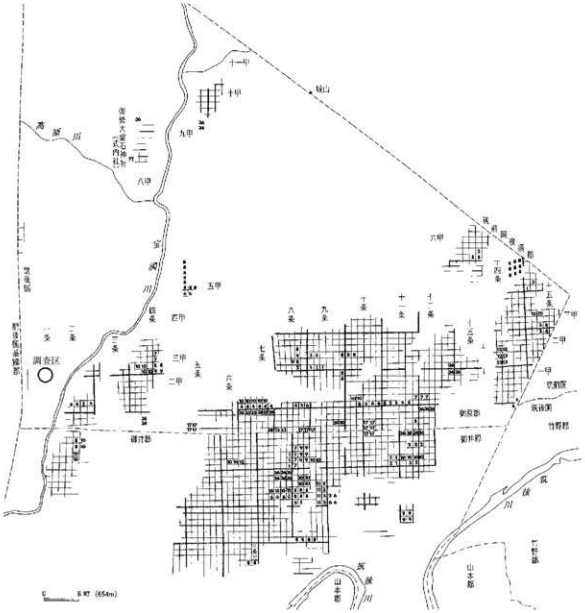
代の所産であっても、一般的な集落において想定される溝状遺構の機能はまず（1）居住域の区画（2）農業用をはじめとする生活用水路の２点が疑われる。ここでは本報告に掲載した溝状遺構の機能・用途について検証したい。

各溝状遺構の詳細についてはⅢ～Ⅴ章で述べたので省略する。溝の流れる方向は①東西方向②南北方向③斜め方向に３分割できるが、構築される時期によって方向が決定される訳ではない。ほぼ同時期であっても異なる方向の遺構が混在している状態である。また、遺構の底面レベルの変化から水流方向を推定し、Ⅲ～Ⅴ章で流れる方向として記述しているが、これについても同様である。但し、「どの時期においても、南北方向にほぼまっすぐな溝を意識的に設置しようとしている」とは断言して良いだろう。出土遺物や埋土の状況によって判断できるのは、弥生・奈良・平安末期～鎌倉・江戸の各時期であり、これらの時代において、南北方位に対応して流れる溝の必要性があったと言える。

２）各時代の溝状遺構について

《弥生時代の溝状遺構》

弥生時代の溝状遺構（福童町遺跡４のSD10）については、水流を伴う溝であり、まとまって出土した甕類以外に目立った遺物は見られない。深さもそれほどではなく、遺構底面や周辺に溝に付随する施設も確認されなかった。このことから、近接する集落に伴う小規模な区画施設と考えるのが妥当だろう。但し弥生時代の遺構については、その周辺の集落・生産域等との関連性を踏まえなければ機能・用途については言及しがたいため、今後の調査による資料の増加を待たなければならない。



第34図　古代の条里制復元図と調査区の位置（小郡市史第一巻より）

《古代の溝状遺構》

古代の溝状遺構（福童町遺跡４のSD12・福童町遺跡６のSD02・SD04と10）の用途として想定しうるのは、集落の区画施設はもちろんであるが、条里制の施行に伴う土地区画施設、あるいは道路状遺構に伴う側溝である。集落に伴う区画施設の否かは、周辺において今後集落が確認されるのを待って検討しなければならない。また道路状遺構に関する溝である可能性は、いずれの溝も調査区西端で検出されているのでそれを示唆するにとどまる。

最後に条里制地割に付随する施設である可能性についてであるが、これは遺跡の立地を踏まえると非常に高いと言える。現在の小郡市域を含む筑後国御原郡・御井郡の条里制地割については日野尚志氏の研究に詳しいが、市内では下岩田・二タ・古飯各区を中心とする宝満川の東岸に、関連地名や地割痕跡が数多く残存している。これに対して西岸には、大保区に所在する式内社・御勢大霊石神社の東隣に地割痕跡が、西福童・寺福童両区に条里関連地名が若干残っているのみである（日野1996）。本書で報告した福童町・福童東内畑遺跡は、宝満川西岸の数少ない条里痕跡の残存する地域なのである。

御原郡の条里地割は、宝満川を挟んで西岸に「一条」「二条」、東岸に「三条」「四条」と名称が付られている。つまり条里制による地割が宝満川の西岸・東岸で区切られるのではなく、一連のまとまりをとってしかれていたと考えられている。東岸の「三条」「四条」については里界線も明らかなので、そこから西へと条里を復元してゆくと、丁度筑後・肥後両国の国境線（現在の福岡・佐賀県境）、すなわち古代の西海道のラインが「一条」の西側ラインであることがわかる。官道と条里地割の関係については小松譲氏が言及しているが、条里制の施行が先行する地域では条里地割を考慮した官道敷設がなされ、後出する地域では官道と条里地割の間に余剰地（あるいは余剰帯）が生まれる。筑後国中・南部に関しては、西海道との関連から道路敷設が先行し、それを基準として条里制が施行されたと指摘されている（小松1997）。筑後国北部である小郡市域も同様に、西海道・筑後平野東西官道の双方が条里地割復元時の里界線上に乗ることから、条里制の施行が先行した地域であると言えるだろう。この福岡・佐賀県境ラインを基準として、東に向かって条里区画を設定した場合、福童町・福童東内畑遺跡の双方は、丁度西から２本目の南北方向の坪境ライン上に乗ることになり、そのラインは地図上で復元する限り、現在の用水路とほぼ一致する。宝満川東岸の二森に残る里界・坪境を基準として北・西の双方に地割を復元延長しても結果は同じである。

現在報告されている条里地割の多くは、昭和年代の航空写真や圃場整備以前の地図を基として復元されている。しかし若干ではあるが、発掘調査においても条里地割の痕跡と認定されている遺構もある（豊後高田市教委2002他）。具体例としては、里界線を示す大畦畔、坪単位を区画する小畦畔、水田耕作に使用した水路、境界部分への土器埋納行為等である。

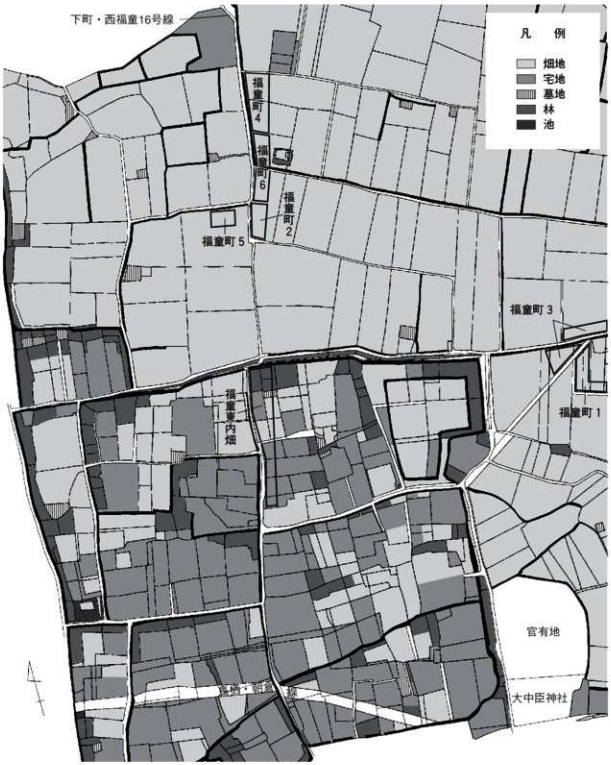
今回の調査で検出された、明確に古代の所産と判断できる溝状遺構は、細く浅いものである。また、掘り込みがしっかりしており、後世まで踏襲された痕跡が残っている福童町遺跡６のSD04・10は中世段階で埋め戻しをされている。溝状遺構に伴う畦畔状の痕跡は、調査区の壁面断面も含めて一切検出されていない。また、東西方向にはこれと交差するしっかりとした構造の溝あるいは畦畔が構築された痕跡がない。溝状遺構の周辺に水田経営を示唆するような土の堆積や遺構・遺物も確認されていない。遺構が検出されていないことが構築されなかったことを示す訳ではないが、積極的に肯定できる資料が確認できなかった以上、条里制地割に伴う溝の可能性もあるとだけ記さねばならない。

《中世の溝状遺構》

中世においては、古代の土地区画と関連施設がそのまま踏襲される例と、条里地割を再掘削するなどして荘園・村落境界として使用する例も多い（谷澤1999）。小郡市内においても、御勢大霊石神社の東隣に残存する条里地割と連続すると考えられる溝状遺構が発掘調査によって検出されている（小郡市教委1999）が、出土遺物は概ね中世のものである。全国的に見ても、古代末～中世初頭にかけて条里制地割をベースとした「再開発」が各地で実施されており、それ以降は、近世の新田開発まで大規模な農地開発はなされていないと言ってよい。

本遺跡の所在する西福童区は、中世から文献にその名を残すが、在地の豪族や有力者などが大規模な土地の再開発を実施したという記録は残されていない。土地区画については、古代の条里地割をその後の土地区画や土地利用に踏襲した地域であると考えてよいだろう。周辺の遺跡においても、古墳時代後期の集落が営まれたのち、奈良・平安時代を空白として、次に中世の遺構が検出されることが一般的であり、同じ生活圏内において集落・生産域の再開発が実施され、古代の生活面が破壊されたと考えるのが自然である。

今回の調査で中世の所産と判断できる福童町遺跡４のSD02・08、福童町遺跡6のSD04・10は、いずれも東西南北にほぼまっすぐに流れる。埋土の状況からは、水流を伴う溝であり、廃棄段階には人為的に埋め戻したと考えられる。出土遺物には二次的な摩滅が激しく残り、日常的な生活の場つまり集落と近接した場所とは想定しがたい。これらの遺構が再掘削を伴う土地の「再



第35図　明治期地籍図と調査区の位置関係

開発」時の構築物かどうかは不明であるが、埋土からは中世の遺物と断定しがたい土器片の出土も見られたことから、可能性は高いと考えられよう。

《近世の溝状遺構》

今回報告した３遺跡においては、この時期の遺構・遺物が圧倒的に多い。また、機能・用途についてはこの時期の遺構が最も検討しやすいと思われる。

近世の西福童区は「久留米藩領　御原郡西福童村」に相当する。村内には街道・往還は通っておらず、いわゆる在郷の村であった。在郷の村には19世紀まで瓦葺屋根は許されず、これを証明するかのように出土遺物に瓦類は全く含まれていない。この時期の遺構については、福童町遺跡４のSD06、福童町遺跡６のSD01・11、福童東内畑遺跡のSD01・08・09のように比較的規模が

大きくプランもしっかりした、明確な機能をもって構築されたと想定される溝と、浅く狭く方位も一定しない、その場の必要に応じて構築されたと考えられる溝が混在している。そして一時的な用途のために構築されたであろう溝は、大規模な溝と接点を持つことが多い。溝状遺構からの出土遺物はほとんどが細片で、破断面も含めて摩滅が激しい。福童東内畑遺跡SD01については良好な遺物が出土しているが、これについては現地表面に近い埋土上・中層つまり溝状遺構を廃棄する際の埋め戻し時に投棄したと考えられる出土状況である。近世の溝についても、やはり集落と密接に関わる溝というよりは集落の末端を区画する、あるいは生産域で使用された溝である可能性が高いだろう。

近世の西福童村を描いた資料は残念ながら存在しないが、近世の村落の様相をある程度反映していると思われる地籍図がある。明治22年に作成されたそれを製図しなおしたものが第35図である。幕末から明治初期にかけての西福童区内において最も広い面積を占めたのは「畑地」であった。東福童村は宝満川に由来する低湿平地、西福童村は大保野・小郡野から連なる台地の南端部からなり、東・西福童村は北東に隣接する寺福童村と共に「西ハ瘦林アリテ田畑開ケス」「東南ハ稍平坦ナレトモ地勢殊ニ低シ、且薪炭ニ乏シ」（『筑後国御原郡之内地誌』）と称された痩地であった。調査区周辺は昭和40年代に下町・西福童16号線の道路改良工事が実施されるまで桑畑・タバコ畑が広がる畑作地域であり、水利施設についても小字内に溜池が１箇所確認されるのみである。また近世の文献においても、『豆田井手水論記録』に記述の残る寺福童村とは異なり、水利権をめぐって積極的に活動した形跡は見られない。これらの状況を踏まえると、近世の溝状遺構に関しては農業関連の用水路の痕跡である可能性が極めて高いと考えられる。

福童町遺跡４のSD06と福童町遺跡６のSD01は、現在の用水路に並走するとともに、同一箇所において複数回掘り直しがなされていることが、調査区壁面断面より明らかとなっている。明治代の地籍図においても調査区の位置には南北方向の溝が記されており、この遺構と同一のものと想定される。なお現在の下町西福童16号線が建設される以前は「荷車が通れる程度の細い道が南北に通り、東側には魚の獲れる水路があった」ことが地元在住者からの聞き取り調査で判明している。これは近世の溝が近代を経て、現代まで継続して使用されていたものと考えられる。

3）溝状遺構の構造について

現在の道路側溝は一定の間隔を空けて集水桝を設置して水を集め、そこから一括して下水管へ流し込むという方法で雨水の処理を行っている。集水桝への水の集積には、側溝設計段階で底面に傾斜をつける等の手法が使われる。

今回検出した溝状遺構は、旧地形が北→南へと緩やかな傾斜をとるのを利用し、遺構底面を北→南へと傾斜させている部分と、逆に南→北の傾斜をとる部分とが同一遺構内において並存している。これは現在の道路側溝がもつ集水桝と同様の機能と考えられる。特定の場所に一旦水を集め、その水位を利用してさらに特定の方向へと水の流れを導く手法である。水が滞りなく流れるには斜角３％以上の傾斜が必要であるが、いずれの溝状遺構の底面傾斜も３％を若干超える程度となっている。どの遺構も一方向への水の流れを意図しており、南北方向の溝については南から北へ、東西方向については東から西へを意図したものが多い。

これには近世西福童村の水利権の問題が関係していると思われる。西福童村に近接する溜池としては山添池・柿添池があるが、これらは当時寺福童村の管轄であり、ここへの廻水は小郡村によって行なわれていた。村の西側を流れる秋光川については、肥前国内の諸村も含めた水争いの結果、小郡村と寺福童村に水利権が保障されていた。寺福童村の水利権は常時保障されていたのではないようで、小郡村との水利をめぐる数々の紛争の記録が残されている。西福童村は、村内の溜池に小郡村から「西福童村廻」と称される貯水措置を受けていたようである。こうしてようやく確保した用水を村内全域に効率良く循環させる方法として、南から北あるいは東から西すなわち村の中心部から村域へと水流の調整を行なったのかもしれない。

4）まとめ

以上の検討結果から、今回報告した溝状遺構に関しては、時期を問わず生産域への水の供給を果たすための遺構であると考えたい。また集落域については、今後の調査による資料の増加が不可欠ではあるが、本遺跡よりも東側に展開していたと考えるのが自然だろう。但し、遺跡地の東に隣接する谷底平野部分や、南に隣接する砂礫台地部分ではなくさらに東の、大保・小郡から連なる台地上に展開していたと思われる。

小郡市内は北部の三国丘陵をはじめとして、弥生時代から自然の湧水が存在する場所を意識的に選択して水田経営を開始し、継続してきた。西福童区については、今回の遺跡地は谷底平野の西端に相当するが、これが歴史的な西福童区の集落の西端を示すのではなく、むしろ西福童区の集落が所有する田畑等生活圏の西端を示すものであり、当時の集落は現在の集落よりもさら

に東、現・県道小郡久留米線のあたりに展開していたのではないだろうか。

［参考文献］
小郡市教育委員会1999『大保横枕遺跡』市文化財調査報告書第137集
小松譲1999「古代道路の敷設時期と条里」『古代官道・西海道肥前路』佐賀県教育委員会
谷澤仁1999「肥前国府周辺の地割について－肥前国府域における地割と官道を基準とした施工計画について－」
『考古学ジャーナル449』
日野尚志1996「御原郡周辺の条里制遺構」『小郡市史　第一巻』小郡市教育委員会
豊後高田市教育委員会2002『嶺崎地区遺跡発掘調査報告書』市文化財調査報告書第11集

（2）福童東内畑遺跡出土の陶磁器について

1）はじめに

本報告書に掲載した３遺跡については、出土遺物が極めて少なく残存状況も劣悪な状態であった。その中で、福童東内畑遺跡のSD01から出土した陶磁器群は、質・量ともに異彩を放っている。これらは調査段階では遺構上面から、数点については表土掘削段階から出土していたため、遺構構築時期の特定材料にならないと判断し、出土状況の詳細な図化記録は残念ながら作成していない。しかし、遺構の掘削を進めるに従って遺物の量は膨大なものとなり、調査完了後報告書作成のため遺物の整理作業を進めるにあたって、極めて良品の多い陶磁器群であることが判明した。出土遺物については壺・甕の貯蔵具、羽釜・土鍋・擂鉢といった調理具、皿・椀の供膳具に加え、土管状製品や灯明皿など日用製品も含まれる多彩な様相を示している。

福岡県内においては、福岡・久留米・小倉の各城下町をはじめとする近世遺跡の発掘調査とその報告が数多くなされている。小郡市内においても薩摩街道沿いの宿場町である『松崎宿旅籠油屋』や『松崎宿構口』の調査が実施され、まもなく報告書が刊行される予定である。だが、近世の一般村落の様相については目立った報告はなく、本来考古学的研究が得意とするはずの庶民の生活についてはさほど言及されてはいない。

ここでは近世の「在郷の村」であった福童東内畑遺跡から出土した陶磁器群を検討し、その特色を抽出したいと考える。

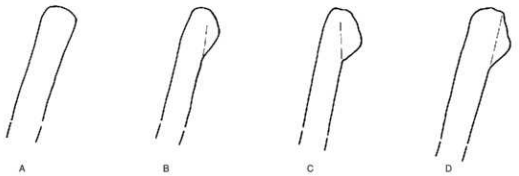
2）溝状遺構出土陶磁器の検討

SD01から出土した陶磁器類は、17世紀半ば～18世紀初頭の範囲でほぼ全てがおさまる。土師質・瓦質のものについては詳細な編年が組まれていないので断言できないが、出土状況から同時期の所産と考えて問題ないだろう。まずは出土遺物を用途ごとにグループ化し、各グループの遺物が持つ特色を抽出したい。個別の遺物の詳細については、Ⅴ章で記しているのでここでは割愛する。

《貯蔵具》

陶器の甕・壺が極少量ある。いずれも鉄釉を施したもので日用雑器と思われる。但し製品としての質は高い。磁器の染付や色絵といった「飾るための壺」は見受けられない。産地は肥前もしくは肥前系に限定される。

使用痕跡については明確に残るものはない。水のように痕跡の残らない粘りのない液体状のものを入れたものであろうか。



第36図　土鍋の断面模式図

《調理具》

陶器・瓦質土器・土師質土器が混在している。

陶器の製品は擂鉢に限定される。胎土が赤～黒褐色で備前焼のような焼締陶器に近いものと、淡黄色の胎土で口縁端部に色付きの釉薬を施すものがある。前者の方が数が多い。焼締陶器系は体部・底部が残存するものが多く、残りも良い。口径40cm前後、底部径12cm前後が標準的な大きさのようである。使用による擂目の摩滅が顕著なもので、未使用と思われるものが混在している。胎土が淡黄色のタイプは数が少なく、口縁部が少量出土しているのみである。

瓦質土器は羽釜・擂鉢・火鉢の３種類である。羽釜は小型に限定され、羽部分で煤付着の有無がはっきりと分かれる。おそらくは竈か七輪、釜台にかけて使用されたのだろう。火鉢は大型のタイプで、内面や高台部分に使用に伴うと見られる摩滅痕跡が目立つ。この２種類はいずれも焼成が良好で、青灰色・黒灰色の硬く焼き締まった製品である。擂鉢は内外面にハケ調整を行なったのち４条１組の擂目を刻むものが主流で、一部は口縁部が片口状を呈する。だが、全体的に焼成が悪く、土師質の土器と区別が困難なものが多い。内面に摩滅痕跡が残っているので、擂鉢本来の用途で使用したことは確実である。

土師質土器は土鍋に限定される。底部が丸く口縁部に向かって広がりを持つものが圧倒的に多く、第21図15のタイプは１点しか見られない。体部が底部から稜を持ってまっすぐに直立するもの、稜の部分から屈曲するものがあり、屈曲するものの方が浅い。また、口縁端部が直立するもの（第36図Ａ）と端部を折り返すもの（第36図Ｂ・Ｃ）、断面三角形の突帯を貼り付けるもの（第36図Ｄ）に４分できる。口径は直径約36cmではほぼ統一されており、規格があったと思われる。完形のものが少ないが、他遺構から出土した土鍋と併せて検討すると、内面下部に焦げ付きや使用による摩滅痕跡があり、外面は体部中央からあるいは口縁端部から底部にかけてこっそりと煤が付着する例が多い。但し、煤付着の有無についてライン状に差異が見られる例と、もやもやと境界が判然としない例とがあり、竈や七輪で使用した場合と、囲炉裏等で直火で使用した場合の双方が考えられる。本遺跡では把手のついた土鍋は出土しておらず、直火で使用した場合の吊り下げ方法については検討しなければならない。また口縁部の断面三角形突帯については、当初時期の差を示すものと想定していたが、SD01以外にもSD13・SK30で複数の種類の土鍋が一括資料と判断できる状況で出土していることから、時期ではなく機能あるいは用途の差を示すものと思われる。土師質土器は「使い捨て」のイメージがあるが、第24図19のように被熱によって底面が剥離するまで丁寧に使用していたようである。

《供膳具》

陶器と磁器が混在しているが、圧倒的に磁器なかでも染付が優勢である。椀・皿の２種類を主流とし、椀は口径13cm・底部径５cm程度が規格となっている。皿は口径18cm・底部径８cm程度のものと、口径25cm・底部径14cm程度のものが一定の規格として存在している。

陶器は古い様相を示すものの中に福岡産のものが若干見られるが、肥前製品の割合が高い。磁器は肥前産あるいは肥前系が多く、福岡産は極めて微量である。文様・口縁端部の形状は多様で、型打ち技法を用いた製品、芙蓉手の製品や高台内部に年銘付の製品も含まれている。極一部の製品を除き、焼成・絵付け部分の発色ともに良好で、高台部分の釉ハギも丁寧に施されており、砂の付着も少ない、良品が多い。なお３種類だけだが、複数客のセット関係が明らかなものが出土している。

使用痕跡は残りにくい器種だが、詳細に観察すると使用に伴うものと思われる微細な傷が残っているものもある。また芙蓉手の製品を除いて、漆継・焼継を施した製品は陶器・磁器ともに見られなかった。比較的良品を使用しているにもかかわらず、破損したものについては躊躇なく処分したようである。

《その他》

土管状製品が数点、灯明皿が少量確認されている。いずれも土師質の製品で、簡略な造りである。

これらの出土遺物については、溝状遺構に廃棄されていたにも関わらず残りが良く、二次的な摩滅がほとんどないこと、遺構上層～中層に出土が偏っており、底面に近づくに従って遺物の出土量が激減したことから、SD01の最終埋没段階で一括して投棄したものと判断している。遺物の時期は陶器・磁器ともに1660年代から1710年代に集中しており、遺構の埋没時期もそこから若干の年代を経た頃と考えて良いだろう。

貯蔵具、調理具については一般的に見られる資料が多いが、供膳具については在郷の村に一般的に普及しているような質の品ではない、極めて質の高い品が含まれている。西福童区は地名こそ中世の文書から見られ始めるが、東に隣接する大崎区のように在地の豪族・富裕層がいた記録はない。近世にいたっても村高の大半が知行地であったが、複数給人の知行地が設定された相知行地であり、武家層と村との関係性は弱かったと考えられる。但し元禄～享保年間は全国的に商品流通が活発化する時代であり、農村においても富農・貧農の格差が進行する時期であった。西福童村においてもこのような農民の階層分化が進展してお

り、その証左となる資料であると言えるかもしれない。

3）肥前製品への偏りについて

出土陶磁器については、SD01だけでなく他遺構から出土した遺物も含めて、肥前産のものがほとんどである。当時の福岡県内には、筑前・須恵焼、豊前・上野高取焼、小石原焼、筑後・朝妻焼等、陶磁器窯が多数存在していたにも関わらず、それらの出土は極微量にすぎない。

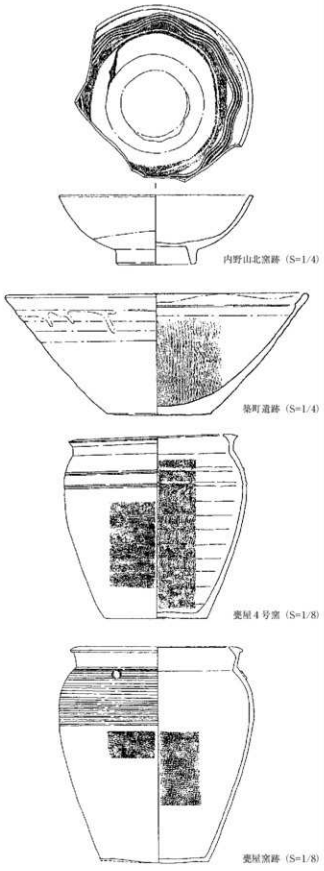
陶磁器をはじめとする土器類は「ワレモノ」であるため、その流通経路は通常水運の利用が可能か否かで検討される。小郡の場合は宝満川、ひいてはその本流である筑後川の利用がそれに相当し、福童東内畑遺跡に限定するならば、筑後・豊前方面から河川を利用して船着場のあった端間まで運送し、そこから陸路で持ち込んだと考えるのが妥当であろう。しかし実際に出土しているのは、肥前産の製品が大多数である。

これには2つの理由が考えられる。まず、筑前・豊前各窯の製品は、小郡への河川を利用した運搬が困難である上、間に丘陵もしくは山地を隔てている。また、福岡城下・小倉城下といった大規模な消費地が近接して利便の良い場所に控えているため、そちらへの供給を優先したと想定できる。小倉城下においては、上野・高取系製品が17～19世紀に渡って高いシェアを占める状況が報告されている（佐藤2006）。一方で、肥前の陶磁器は17世紀の早い時期から全国各地に流通が始まっており、運送上の利便を考慮することなくどのような場所にでも供給することが可能であった（大橋2002）。つまり「窯業」という経済活動を行なう上での「対費用効果」が生み出した結果であると考えられる。もう1点は、古代西海道に近接しているという遺跡の立地条件である。西海道は近世にいたってもほぼ同じルートを踏襲して、長崎街道として機能しており、参勤交代にも利用される当時の幹線道路であった。今回報告する遺跡は、肥前の窯業生産地からこの街道を利用して、現在の鳥栖市田代付近にあった田代宿を経て彦山道（現在の国道500号線）に入ると、その南約1㎞に位置している。また彦山道沿いには商品売買の許可された在郷町である小郡町（村）があり、他国から流入した物品の商取引が行なわれていた。これら双方が影響して、出土遺物に肥前製品が圧倒的な割合を占めることになったと考えられる。

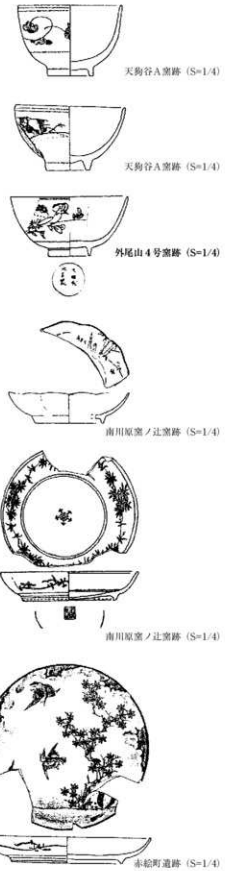
4）一括投棄の要因について

今回報告している3遺跡が所在する西福童区は、古くから水害に襲われてきた地域である。最近の例で言えば、昭和28・38年の大水害があり、筑後川の増水によって福童東内畑遺跡から約150m南（現在の鳥栖・朝倉線付近）までほどっぷりと水につかったと言われる。近世においても状況はほぼ同じであったようで、当時の文書に洪水に関する記載が残されている。久留米藩の家老有馬内蔵助の記した『古代日記書抜』においては、「万治二年（1659）の洪水で福童村の田畑に流入した土砂の除去を郡奉行が実施」（古代日記書抜万治三年二月条）との記述があるほか延宝四年（1676）五月六日の洪水被害は御原・御井郡の被害が他の久留米藩領より大きかったようで、久留米藩に種籾の拝借願（古代日記書抜延宝四年五月条）を提出している。この2つの記載には注目すべき点がある。万治二年（1659）・延宝四年（1676）ともに、SD01から出土した陶磁器の年代と非常に近い。特に延宝四年（1676）については、SD01の埋没年代と想定しても齟齬はない時期である。

本報告で記している福童町遺跡4・6、および福童東内畑遺跡Ⅲ・Ⅳ区の遺構面は、褐色もしくは黄褐色ロームのしっかりとした地盤である。これは市内の台地上にある他遺跡と比べても何ら遜色はない。それに対して、福童東内畑遺跡Ⅰ・Ⅱ区の遺構面は黄褐色砂質土で非常にしまりが悪く、わずかでも水の影響を受ければ浸食される状況であった。またⅠ区においては、遺構掘削時にピットや土坑の壁面が基盤層と想定した色・質の土ではなく、代わりに黄褐色粗砂や褐色・暗褐色土がまだらに露出するという現象が頻繁に見られた。Ⅰ区においては調査完了後、埋め戻し作業を実施するまえに、南端部分に重機でトレンチを掘削し、調査面の下に遺構面が存在しないか否かの確認を行なっている。その際、遺構面や遺物は全く確認されなかったが、調査中の遺構検出面の下に、黄褐色砂質土と黄褐色粗砂が褐色・暗褐色の間層を挟んで複数枚堆積している状況が看取された。これについては、洪水のような水害に伴う可能性がある堆積として認知し、写真・図面によって記録をとっている。遺構検出面で確認した複数色の土の堆積は、おそらく万治二年段階の洪水の痕跡であり、この洪水の被害は本調査区まで及んでいたと考えられる。また今回の調査で検出した遺構のうち17世紀台の所産であるものは、この洪水の後に構築されたものであろう。そしてSD01の埋め戻しは、遺構上面が削平されているため推測の域をでないが、出土遺物の特徴から鑑みると延宝四年の洪水被害の後処理に伴うものと想定できる。



第37図　17世紀代の肥前陶器の製品例



第38図　17世紀代の肥前磁器の製品例

［参考文献］
大橋康二2002「肥前陶磁の流通（西日本）」『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』九州近世陶磁学会
佐藤浩司2006「北九州市域の江戸後期における庶民向け陶磁器の流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（九州編）』九州近世陶磁学会

（3）福童東内畑遺跡の埋甕遺構について

1）福童東内畑遺跡の埋甕について

福童東内畑遺跡においては、大型の土師甕がSK11・SK17において計3点出土している。SK11においては土坑内で設置状況がわかる状態で検出されており、SK17では１点が天地を逆にして、もう１点は元の形状が分からないほどばらばらに破壊された状態で検出した。内面には乳白色の石灰質が多量にこびりついている。このような大甕を伴う遺構は通常「埋甕遺構」と称され、便所としての機能を果たしていたと考えられる。一般的に「甕形汲取式トイレ」と呼ばれるものである。

埋設状況のわかるSK11においては、一旦遺物より一回り大きい土坑を掘った後、その中央部にさらに底部がおさまる程度の浅いくぼみを掘りこみ、そこに甕を設置して周囲を真砂土で固定している。甕の転倒を防止するための措置と考えられる。SK11はSD01を切っており、SD01は17世紀後半に埋没したと想定されることから、それ以後の遺構と判断できる。

また本遺跡では甕の底部しか出土していないが、同じ小郡市内の松崎では「便槽」と判断される土師質の製品の口縁部が出土しており、その形状は通常の甕のように頸部ですぼまり口縁部で再び開くのではなく、体部から寸胴で口縁端部に帯状の突帯を持つ、いわゆる土管と酷似している。

2）大甕の製作方法について

今回出土した土師甕は、まず底部の円盤状部分を設置し、幅広の粘土帯を積み重ねて体部を成形し、接合部をナデつけた後全体を叩き締め、その痕跡をナナメもしくはタテ・ヨコのハケで調整をするという、伝統的な土師質製品の作り方を踏襲している。但し、完成したあとの切り離しについては、通常の陶磁器のように糸切りを施した痕跡はみられない。

焼成は軟質の酸化焼成であるため、弥生時代の甕棺のように簡易な焼場を作って焼成したと考えられる。しかし多くの例は外面の摩滅が激しいことから、焼ムラや黒斑の存在等は不明であり、その方法については明確に捉え切れていない。本遺跡で出土した製品については、内面は比較的良好に焼けており、瓦質土器や須恵器によく見られる焼成不良による破断面の色調変化は観察できなかった。なお、口縁部径や器高は不明であるが、底径30～40cmで江戸時代後期の陶器甕と比べると一回り大きい。

3）他地域の埋甕遺構について

埋甕遺構が発見された場合、竈を伴う遺構と近接していれば水甕や保存用の甕と判断され、それ以外のものについては便所遺構として報告される例が多い。近世の便所遺構は東日本では木桶を用いた埋桶、西日本では土器を用いた埋甕が優位を占める傾向が見られるようである。甕の種類も多岐に渡り、近畿・中国地方においては備前焼が、関東・中部地方においては常滑焼が使用されるのが一般的である。土師質のものは地域を問わず散見される。施釉陶器の大甕を用いるのは汚物が周囲の土に浸透するのを避けるのと、耐久性の問題と考えられる。近世の便所は芥溜（ごみ捨て場）・井戸と３点セットで設置される例が多く、汚物の中の寄生虫卵が井戸水へ影響を及ぼさないようにという衛生的な意味もあったのだろう。便槽として使用される大甕の生産地は、各地域で主に流通している水貯め用の大甕生産地とほぼ一致しているところが興味深い。

近世の便所遺構は複数の遺構が近接して検出される例が多く、内部残存物や周辺土壌の分析から「男女別」「排泄物の大小別」に埋甕・埋桶を設置していたことが明らかにされている。今回は３個体の大型土師甕を検出しており、２点は原位置を保っていないとはいえ出土地点は15mほどしか離れていない。また甕のサイズや製作方法にも類似性が高く、一連の便所遺構であった可能性は高いと思われる。

巻末写真図版

① 福童町遺跡4　調査区全景（1）（南上空から）

② 福童町遺跡4　調査区全景（2）（真上から）

図版2

① 1号溝状遺構　土層断面（東から）

② 2号溝状遺構　土層断面（東から）

③ 1・2・3・4・5号溝状遺構　完掘状況（東から）

④ 6号溝状遺構　土層断面（南から）

⑤ 6号溝状遺構　完掘状況（北から）

⑥ 7号溝状遺構　完掘状況（北西から）

⑦ 8・9号溝状遺構　土層断面（北から）

図版3

① 8号溝状遺構　完掘状況（南西から）

② 10・12号溝状遺構　土層断面（北から）

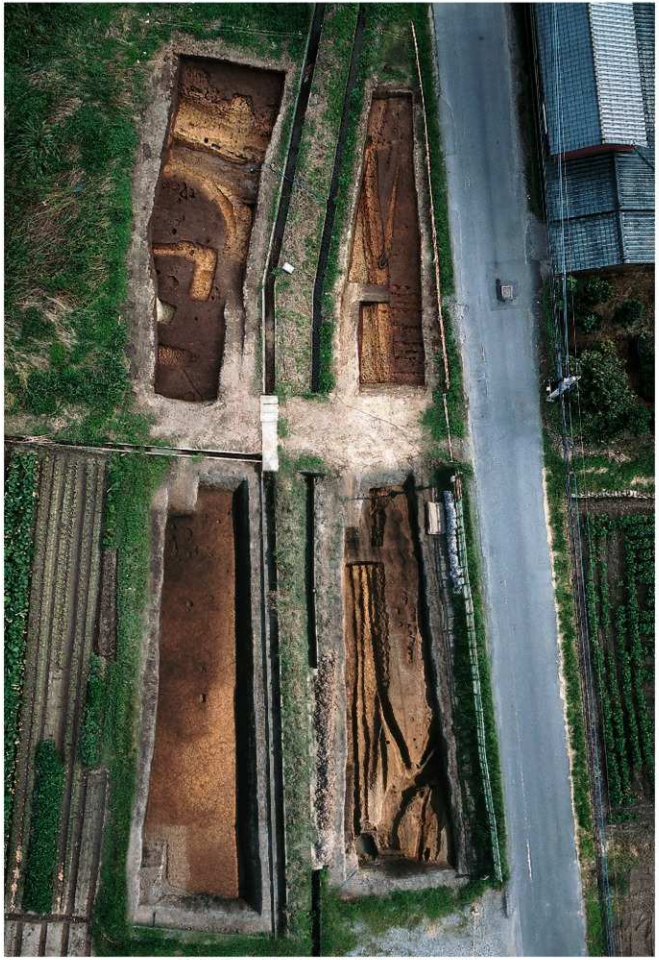
③ 9・10号溝状遺構　土層断面（南から）

④ 10号溝状遺構　遺物出土状況（北西から）

⑤ 9号溝状遺構　完掘状況（南から）

⑥ 10・11・12号溝状遺構　完掘状況（北から）

図版4



福童町遺跡6　調査区全景（合成処理、写真上方が南）

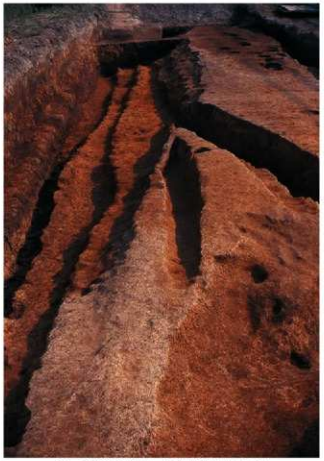
図版5

① 1号溝状遺構　完掘状況（北から）

② 2・8号溝状遺構　完掘状況（南から）

③ 3号溝状遺構　完掘状況（北から）

④ 4・9号溝状遺構　完掘状況（南から）



⑤ 5号溝状遺構　完掘状況（北から）

① 6号溝状遺構　完掘状況（南から）

② 7号溝状遺構　完掘状況（北西から）

③ 17号溝状遺構　完掘状況（南東から）

④ 10・16号溝状遺構　完掘状況（北から）

⑤ 11号溝状遺構　完掘状況（北西から）

⑥ 12号溝状遺構　完掘状況（西から）

① 14号溝状遺構　完掘状況（北西から）

② 2号土坑　土層断面（東から）

③ 2号土坑　完掘状況（東から）

④ 3号土坑　完掘状況（北西から）

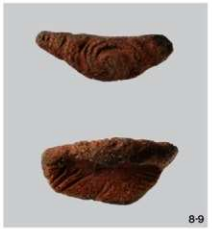
⑤ 4号土坑　完掘状況（北東から）

⑥ 5号土坑　土層断面（西から）

⑦ 5号土坑　完掘状況（北西から）

⑧ 1号土壙墓　完掘状況（西から）

8-1


8-9

8-12

8-19

8-20

8-18

12-4

12-7

12-19

12-23

12-29

12-32

SD11出土鞴羽口12

福童町遺跡4・6　出土遺物

福童東内畑遺跡　調査区全景（合成処理、写真上方が南）

① 1号溝状遺構及び1・2・3号土坑（北から）

② 5号土坑　遺物出土状況（東から）

③ 6号土坑　遺物出土状況（東から）

④ 7号土坑　遺物出土状況（南上方から）

⑤ 8号土坑　完掘状況（南西から）

⑥ 9号土坑　遺物出土状況（南西から）

⑦ 10号土坑　完掘状況（東から）

① 11号土坑　遺物出土状況（東から）

② 13・14号土坑　完掘状況（西から）

③ 15号土坑　完掘状況（北西から）

④ 16号土坑　完掘状況（北東から）

⑤ 17号土坑　完掘状況（南東から）

⑥ 18・24号土坑　完掘状況（西上方から）

⑦ 19号土坑　土層断面（東から）

⑧ 20号土坑　完掘状況（東から）

① 21号土坑　土層断面（北西から）

② 23号土坑　土層断面（南東から）

③ 27号土坑　土層断面（南から）

④ 27号土坑　完掘状況（北から）

⑤ 28号土坑　完掘状況（北西から）

⑥ 29号土坑　土層断面・遺物出土状況（南から）

⑦ 30号土坑　土層断面・遺物出土状況（西から）

⑧ 30号土坑　完掘状況（北から）

① 1号溝状遺構　完掘状況（Ⅱ区南から）

② 1号溝状遺構　遺物出土状況（1）（Ⅱ区）

③ 1号溝状遺構　遺物出土状況（2）（Ⅱ区）

④ 1号溝状遺構　遺物出土状況（3）（Ⅱ区）

⑤ 1号溝状遺構　遺物出土状況（4）（Ⅱ区）

⑥ 1号溝状遺構　遺物出土状況（5）（Ⅱ区）

① 1号溝状遺構　完掘状況（Ⅳ区南から）

② 1号溝状遺構　遺物出土状況（Ⅳ区南から）

③ 2号溝状遺構　完掘状況（南西から）

④ 3・6号溝状遺構　完掘状況（西から）

⑤ 1・4号溝状遺構間　土層断面（北から）

⑥ 5号溝状遺構　土層断面（東から）

⑦ 6号溝状遺構　土層断面（西から）

① 7号溝状遺構　完掘状況（西から）

② 8号溝状遺構　完掘状況（西から）

③ 9号溝状遺構　完掘状況（西から）

④ 10・11号溝状遺構　完掘状況（北から）

⑤ 13号溝状遺構　遺物出土状況（南東から）

16-4

16-2

18-2

17-1

19-1

16-9

17-2

20-2

17-8

20-3

18-1

20-4

福童東内畑遺跡　出土遺物（1）

20-6

20-12

21-9

20-9

20-13

23-4

20-10

21-15

23-7

23-9

20-11

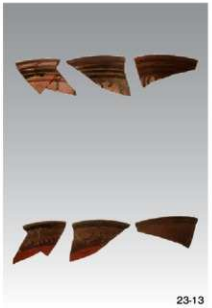
21-11

23-10

福童東内畑遺跡　出土遺物（2）

23-11

23-12


23-13

24-19

SK29出土粘土塊

福童東内畑遺跡　出土遺物（3）

24-6

SD12出土鋳型状製品

24-17

24-19

24-7

24-11

24-5

24-14

25-6

27-6

24-12

25-8

福童東内畑遺跡　出土遺物（4）

27-7

27-8

29-5

29-10

29-11

29-7

29-15

29-9

29-16

29-17

福童東内畑遺跡　出土遺物（5）

31-11

31-19

30-4

31-14

30-5

31-1

31-22

32-1

31-2

31-23

32-9

31-16

31-24

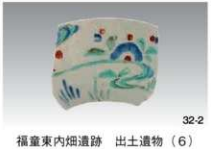
32-15

31-17

30-11

30-7

31-18


32-2

32-21

福童東内畑遺跡　出土遺物（6）

図版22

福童東内畑遺跡　出土遺物（7）

報告書抄録

ふりがな	ふくどうまちいせき　4・6　/　ふくどうひがしうちはたいせき
書名	福童町遺跡　4・6　/　福童東内畑遺跡
副書名	福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第226集
編著者名	上田　恵
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒838－0106　福岡県小郡市三沢5147－3　TEL 0942－75－7555
発行年月日	平成19（2007）年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
福童町遺跡4	福岡県小郡市福童字町・江削	40216		33°22′48″	130°32′47～48″	2005.09.12～2005.11.11	534㎡	下町西福童16号線道路改良工事
福童町遺跡6	福岡県小郡市福童字町	40216		33°22′46″	130°32′47″	2006.07.14～2006.09.21	837㎡	
福童東内畑遺跡	福岡県小郡市福童字東内畑	40216		33°22′37～47″	130°32′47″	2006.04.12～2006.07.05	830㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福童町遺跡4	集落 その他	弥生中期 古墳後期 奈良前期 中世 近世	溝 溝 溝・土壙墓 溝 溝	弥生土器 土師器・須恵器・石器 土師器 陶磁器 陶磁器	
福童町遺跡6	集落 その他	古墳後期 奈良前期 中世 近世	溝 溝・土壙墓？ 溝 溝	須恵器 土師器・須恵器 土師器・瓦器・陶磁器 陶磁器・鉄器・輪羽口	
福童東内畑遺跡	集落 その他	中世 近世	溝 溝・土坑・井戸	陶磁器 土師器・瓦器・陶磁器・鉄器	

福童町遺跡４・６
福童東内畑遺跡
—福岡県小郡市福童所在遺跡の調査—
小郡市文化財調査報告書　第226集
平成19年３月31日
発行　小郡市教育委員会
小郡市小郡255－1
印刷　瞬報社写真印刷㈱九州支店
福岡市中央区天神５－４－16